

第12回銀華文学賞発表

銀華文学賞

しばらくお休みしておりました銀華文学賞を、二〇一九年、四年振りに再開させていただきました。長い中断にもかかわらず、日本全国より二〇九篇の多数の御応募をいただきました。厚く御礼申し上げます。

予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八覚正大・小浜清志・五十嵐勉の選考委員による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

誌面の都合により、奨励賞などの作品は次号以降に順次掲載させていただきます。

第十二回銀華文学賞授賞式・祝賀会は、申し訳ございませんが今年も省略させていただきます、賞状・賞品などは後日直接御本人宛てに送らせていただきます。御了承ください。なお銀華文学賞は明年、年齢を四十歳からに繰り下げさせていただきます、四十歳未満の方は文芸思潮新人賞を設けて、新たに募集する予定です。どうぞまた奮って御応募ください。お待ちしております。

最優秀賞

「最後の帰郷」

西山慶尚

(愛媛県新居浜市)

「向日葵」

森本あさ子

(愛知県豊橋市)



優秀賞

「再出発」

内田東良

(東京都世田谷区)

「銀色の虫」

土田ひろし

(静岡県沼津市)

「クチボソ暮色」

井上一志

(東京都八王子市)

「キム・ジョンウン先生、

革命の日は近いようです。」

倉木基志

(宮城県仙台市)

奨励賞

「いいね！」

牧 康子

(東京都杉並区)

「檸檬の木のある風景画」

しのぶ憂一

(静岡県伊東市)

「幻想家族」

辻本哲次

(福岡県田川郡)

「鬻ひやく」

大新健一郎

(兵庫県西宮市)



銀華文学賞優秀賞メダル

佳作

- 「二分」 高岡啓次郎
- 「一九七一年・雨空の花火」 立野幸雄
- 「新しい道」 森千恵子
- 「一粒の涙」 近藤幹夫
- 「那覇離愁」 山本憲明
- 「撃竹」 西田信博
- 「雨、嫌いやねん」 椿山 滋
- 「一九六五 夏」 藤井典央
- 「別れのかたち（キンズの根）」 大江純子
- 「老春の余韻」 路夢
- 「あじあ号の時代」 朝川 彪
- 「懐かしい足音」 梶川洋一郎
- 「もすけ」 坂口保典
- 「くしやみ」 阿部千明

「バージンロード」

是田一作

「村岡はぼくに」

河野つとむ

「明日への帰還」

勢 隆二

「トカゲの頭切り」

竹中 寛

「オールドローズ荘」

枝 道子

「刹那」

樽井弘志

「ある男の物語」

上野雄三

「今井秀二の手記 暗路」

田中 豊

歴史小説賞佳作

- 「血と土と——豊後杵築藩農民一揆始末——」 笠置英昭
- 「南部の老臣」 久保協一

在日の優れた小説

大高雅博



今回は下読みの段階から、全体にレベルが上がっていることが感じられた。それは裏返せば、同じようなレベルの作品が多く集まってきたに在る事になる。選別は難しくある境を突破するための算段が書き手には必要となってくる。

今日のな題材も多く見られるが、単に題材だけでは、上には残れない。

さて、僕が最も興味を引かれたのは、優秀賞に選ばれた倉木基志氏の「キム・ジョンウン先生、革命の日は近いようです」。在日について考えるときにジル・ドゥルーズが言ったマイナー文学という言葉を出す。これは、完全な裏め言葉なのだ、自国語ではなく「別の国の言葉で」小説を書いた人々を指す。その代表がカフカである（自国のチェコ語ではなく、ドイツ語で書いた）。そのほかにマン

河林満賞の移設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は二〇一五年より、銀華文学賞からまほろば賞の中に移され、同人雑誌掲載の小説作品を対象にし、まほろば賞選考会において同時に選考され、決定されることとなりました。

受賞者には賞状、賞品、賞金五万円がまほろば賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮



ドルーズはマゾッホも高く評価しているが、一般的にはカフカであり、直接的、間接的に関わらず後世の小説家に与えた影響は、計り知れない。カフカはドイツ語で書かざるを得なかったのだ。そこにすでに、小説的世界が成立する。在日の作家こそマイナー文学そのものである。李恢成という在日の作家がいる。「見果てぬ夢」という長編は本当に素晴らしい作品である。話は大きくそれるが、大江健三郎氏がノーベル文学賞を取ったとき、次に日本で、受賞しそうな人をと考えたとき、浮かんできたのが李恢成であった。今でもその考えには変わりはない。村上春樹氏の前に李さんだと思ふ。ただし、残念なことに翻訳が出ていないようだ。ただ、在日の李さんが、古井由吉、大江健三郎とともに日本の文壇のトップを歩まれていることは不思議だが間違いない。

在日に対して、差別、偏見、ヘイトスピーチのようなものが、現実にはあるのだろう。この小説はそれを逆手にとって、喜劇としている。母親が亡くなる間際に言った韓国語がわからない。結婚式に日本名で、出席してほしいと頼まれ、思い悩む。喜劇は当事者達が、真面目に悩めば悩むほど、面白くなる。ただし、そこまでだと、今までもあったかもしれない。

ヘイトスピーチというのは、陰に隠れて、弱者に対して一方的に暴言を吐くということで、卑怯な行為で、この国の前身でもある。現代の自爆テロは日本の特攻が原型だという話がある。日本軍の特攻はほとんど成果を上げられず、今から考えると、全く無謀だと思われるが、時代が狂気となっていたのだろう。戦争に現実にかれた世代はすでに多くが亡くなっているだろう。作者のように、おそらく微かな記憶が在る人々も少なくなっているのだろう。だからこそ、こういう小説は必要なのだ。優秀作土田ひろし氏「銀色の虫」は、ほげが始まった老人の話であるが、二階から、下の商店街を見て、歩く老人から昔を思い出す。面白い趣向だと思う。健さんという昔なじみが工事現場に入っていくのを見るが、そこにはいない。現実とほげが混ざっていく。興味深い小説である。

優秀作内田東良氏「再出発」リタイアして、離婚した男の話だが、孤島に一軒家を買って住むというのが目新しい。入院をするときに保証人がいなくてという話も面白い。奨励賞の辻本哲次氏の「幻想家族」は、義父からの性的虐待と、それを裁判で認めさせるまでの話で、今日的な題材でまとまりもあり、もっと上でも良いかと考えたが、選者の一人から異論がだされた。現実起こったことと、小説との関係の問題だと思ふ。

奨励賞のしづま一氏の「檸檬の木のある風景画」主人公は、最初から最後まで、契約社員である常勤講師であり、定年退職して三年になる、家にいる父親は半身不随で認知

の歪みがあるのだろうが、例えば、都心部の居酒屋、コンビニでは、日本語の上手な外国人が働き、彼らなしでは動かない現状がある。これからもどんどん増えていくだろう。内政が行き詰まってくるときに、政治家は、外国に目を向けさせようとする。昔も今も韓国、北朝鮮、中国である。政治家が選挙のためにそれらを煽る訳だ。日本の島国根性と呼ばれるような、狭い偏屈な感覚で、ヘイトスピーチのような馬鹿げたことをやっているこの国で、当事者にとっては大変だが、チマチマした問題にかかずらわっている間に、時代は根本的なパラダイムの変化が起きているのだ。この小説では最後に結婚式となるが、それが女性同士の結婚式なのだ。これは示唆に富んだ優れた小説である。

当選作の森本あさ子氏の「向日葵」は交通事故と思われる事故により損傷を受け、病院に入院しているのだが、水も飲めない、眠れない、そして、一日中続く痛み、その痛みを、読者は感じるだろう。その文章力だけでも、十分に当選作の価値はある。だが、現実として閉塞し始めているこの国においては、その苦しみを超える何か欲しかったとは思ふ。当選作西山慶尚氏の「最後の帰郷」は、しっかりと文章で書かれている。マリアナ沖海戦あ号作戦前の長兄が、帰郷する話であるが、無論家族にはそんな話はない。ただ、どこかに向けたいどうしようもない気持ちがある。まだ二十歳にもなっていない若者なのだ。零戦の爆撃は特攻

症である、妻は介護に耐えきれず、別居している。子供達が良い企業に就職ができ独立している。貧困の家系を終わらせるために援助を受けない。彼は町を歩く、さまよっている。日本の理想憲法の文言が出てきているが、現実には余りかけ離れている。自分を証明できるものを全く持っていない。不審がられた警察にも本名を言わない。最後に、彼が死ぬつもりで歩いていることがわかる。死んでも、寝たきりの父親がいるわけで、何の解決にもならないのだけれど、この人の文体に、迫力を感じた。

賞には届かなかったが、路夢氏の「老春の余韻」は面白かった。リタイアした老人ものであるが、町の色々な問題を解決していくという前向きな姿勢が良かった。こういう前向きな話は珍しく積極的に押したのだが、残念な事にエッセイではないか、それを並べただけで、小説になっていないとの指摘があり、残念ながら、それは当たっている。まだ、良い素材の段階なのだ。ここから、小説化するのが大変なのだけれど、もう、一度、考えて見られてはどうだろうか。

銀華文学賞は、多くの小説を書きたいという人々の圧力があって復活したと思うが、当然ながら、まだ書くべきものはあるし、まだ、見えていないものもある。お互い、頑張りましょう。

シルバー世代の特権

五十嵐 勉



四年お休みをした銀華文学賞で、再開してどのような作品が集まってくるのか、不安と期待が入り混じった心境だった。蓋を開けてみて、心配していたほどではないことに、少しほっとした。レベルの高いものがそれなりに集まっていたからである。ただ、題材があまりに高齢者の領域に偏り過ぎているのは、不満だった。四十五歳以上（次回からは四十歳以上）と言っても、題材がすべてその年齢以上の高齢に限定しているわけではない。むしろ晩年近くになって、若い頃のことを思い出し、その熱い活動や苦悩を振り返って、それを記し、その意味を問おうとして書く立場があつていいだろう。その領域を題材にしたものが少なかった。シルバー世代の特権として、経験世界が豊かであるということ、人生を振り返る叡智が深くなっていることが挙げられる。先の短いことを悲観的に考えること以上に、過去の豊かさを再現し、新たな意味付けをすることも重要なのではないか。数十年を隔ててや

つと理解でき、その意味がわかることも少なくない。その特権を積極的に生かしてもらいたい。それも銀華文学賞の役割の一つであると思っている。

今回最優秀賞に選ばれた二つの作品にはそれがあつた。

一つは西山慶尚氏の「最後の帰郷」であり、もう一つは森本あさ子氏の「向日葵」である。

「最後の帰郷」は、マリアナ沖海戦に出撃して戦死した兄の文字通り最後の帰郷を書いた作品で、許された四日間のことを細かく記してあるのだが、自分の死を予感して、いつまでも夕暮れの中を子供の頃の思い出に浸って木馬遊びをする情景は胸を打たれる。兄は零戦を爆撃もできるものに改造した「爆戦」に乗って出撃し、最期を遂げるのだが、その前に自分の家の上を飛行するシーンも感動的である。少し調べてみると、零戦を爆撃機として使う着想は一九四七年にはもうあつたようで、その訓練を積んだ部隊がマリアナ沖海戦には出撃している。これがさらに変わって戦局の悪化によって「特攻」となっていくのだが、その意味で「爆戦」は「特攻」の前身とも言える。西山氏はまほろば賞などで、一貫して「特攻」をテーマに追い続け、時代錯誤という批判を受けながらも、ひるまず筆を貫き通した。その原点には、この体験があるということ、深く納得させられる作品である。同時にこれは御自身が長く大事にし、暖めてきた題材であることを受け止めずにはい

入選

- | | |
|-------------|--------|
| 「ねえちゃん」 | 安部としき |
| 「罫箋と蝶」 | 井本元義 |
| 「最後の敵」 | 南 理維 |
| 「二枚の絵」 | 山崎人功 |
| 「天秤」 | 本田奈緒美 |
| 「別れの理由」 | 松井 憲 |
| 「ビーの約束」 | ほそやまこと |
| 「蜘蛛の網」 | 鷺津 勇 |
| 「さよならホームラン」 | 内村今日平 |
| 「紫陽花はつなぐ」 | 安保美智子 |
| 「無題」 | 足立京子 |

※今回も力のある作品が多かったため、入選として賞揚させていただきます。

られなかった。この作品には敬意を表したい。

「向日葵」は象徴性の高い作品である。少女時代の瀕死の大怪我の記憶を患者の意識から描いていて、生死の間を彷徨う危うい感覚が、人生全体を暗示する、その奥を蔵した匂いがいい。筆者の森本あさ子氏の実人生も、かなり深いようで、その一般的幸福からは遠い嘆息の深さが、そのまま作品の音色として響いている。これは人生を回顧するその段階になって初めて書けるものかもしれない。「ひまわりの群像」が目の前をぞろぞろ歩いていくという病の中の透視は、日向を歩いていくクラスメイトたちの幻像以上に、一般社会の人たちとの乖離かいりを表して、象徴として尖鋭に迫ってくる。「あるとき死んでいたほうがよかった」という述懐は、「人生は生きるに値するか」という問いかけにも反響して、いつまでも鳴り響いてくる。この後にもまだいろいろ書きたいものがありそうな、潜在力を有した作家を祝福したい。

優秀賞作品は、全体に老年の哀切を訴えるものが多く、それなりにおもしろいのだが、それに偏り過ぎていいる面が、やや目立った。

井上一志氏の「クチボソ暮色」は子供のいない老年夫婦が、行末を案じつつ、水生物館などを散策しながら夫婦の軋轢あつれを逆に伴として確かめていくきめ細かな心理が揺れている。夫婦間の揺れに味のよさがある。ただ、子供がいな

いことが、現在ではそれほど深刻なマイナス要素としては考えられていない見方もあるので、その点が先行きの短かさの切迫性を、やや削いでいた。

内田東良氏の「再出発」は、離婚した老年の男の一人暮らしを描いて、その日常と心境を生き生きと書いている筆致は、鮮やかである。病院での検査の不安や、クラス会のことなど、この年齢での世界は立ち上がっている。最後に不通になっていた娘からのメールと励ましを得て、安堵するストーリーは、平凡と言えれば平凡だが、どこかにほっと救われる気が湧き起こるのは、筆者の底に流れる温かさかもしれない。むしろそれを汲み取るべきとも思える。

土田ひろし氏の「銀色の虫」は、老年の問題にさらに尖鋭に切り込んでいて、認知症に浸食されていく意識を鮮やかに描いている。記憶が曖昧になって怖さを、鮮烈に突き付けてくる。意識と記憶が時間の配列を失いつつ壊れていく恐怖は説得力がある。日常の意識が漸次壊れていく過程はこのようなものかもしれない、という共感はずいぶん、何かもう一つ目新しい視点もほしい気がした。

「キム・ジョンウン先生、革命の日は近いようです。」は、これだけ老年とは離れた世界である。在日朝鮮人家族をリアルに浮かび上がらせて、おもしろい躍動がある。冠婚葬祭に絡んで夫婦の姓の問題まで、様々な問題を抱えつつ日本で生きていく生活の一面がよく浮かび上がってくる。し

プに乗り込んで行って、自分もそれに加わりたいとする結末は、露骨すぎて味消しになっている。それよりも安楽死のような領域を加えていったほうが、奥行きが増しただろう。結末が醜悪の方向に流れたのが惜しまれる。タイトルも凝り過ぎで、もつとわかりやすくても匂いの深い言葉がこの題材には合うと思われる。

佳作にもいいものがあつた。「撃竹」(西田信博)は仏教の悟りへの道程を描いていて、完成度は高い。文章も緊密で、最後まで隙なく読ませる。ただ、あまりに宗教の内的世界のドラマに終始しているのが、社会的、人間的な広がり欠ける。技量の高さは唸らせるものの、一つの領域に限られ、完結している点で、宗教の外に出てこない恨みがあつて惜しく思った。

「新しい道」(森千恵子)は、耳の病気の手術から始まって、図書館通いを通じて、そこで知り合った人から手話など新世界を教えられながら、老いを明るく前向きに受け入れていくストーリーは好感が持てるが、小説としてはもつと起伏がほしい。

「くしゃみ」(阿部千明)は、「くしゃみをされると記憶が飛んでしまう」という発想がユニークで、おもしろく読み進めていけるのだが、だんだん話がくしゃみから遠のいていく展開がもの足りなかつた。せつかくの着眼をもつと認知症とかに逆効果があるような方向で、生かしていけば好

かも自分のそれが北朝鮮の指導者と同じ発音であることに、皮肉がある。在日朝鮮人の家庭を名古屋弁に乗せて軽妙に描いたその筆は、特筆すべき迫真性があるものの、ややわかりにくく、振動の大きさが邪魔になった。この会話体、この文体で書かざるを得ず、喜劇にするしかないのだろうが、これによって逆に、何か逃げていくものがあるような気もする。それは今後の課題となるだろう。

題材のインパクトでは、奨励賞のほうが強いものがある。「幻想家族」(辻本哲次)は義父からの性的虐待を取り上げていて、児童相談所の手続きや運びなどリアリティがある。この領域は男女間の内側の心理も絡んでくるので難しい面があるが、よく公的な立場を徹底してその客観性から踏み外さずに書いているので、事件そのものをよく伝えてくる。しかし逆にそのために、善と悪とを切り分けなければならず、社会派の筆致で完結してしまっている点に、陰影の浅さが目につく。やむをえない処置であると思うが、その限界を有しつつ、まとまった作品にしている。私としては、こちらのほうが優秀賞に近いかとも思った。タイトルはもう一つピタリしていない。

「霧」(大新健一郎)は、老人売春を扱っている。老人の性をテーマにして、ここまで正面から切り込んだ小説は珍しく、興味深いし、また筆運びもしっかりしていて、かなりの技量を感じさせるが、最後に自分も老女の売春グルー

短編になっただろう。

「懐かしい足音」(梶川洋一郎)は、警察の異動の季節から始まり、署長に栄転した主人公を通しての、警察内部が詳しく描かれるが、途中から「運ちゃん」と呼ばれる昔の同僚の話に中心が移っていく。姉がやぐざに騙されて輪姦の後転落し廃人になって死んでいったその復讐を果たすために密かに警察人となったという動機からしてユニークで、こちらの人物像がおもしろく、ストーリーがそちらへ吸い寄せられていく。結局題材の採り方に不適があつたようで、「運ちゃん」を正面から書いた方が小説としてしっかり成立した観が否めない。主軸を「運ちゃん」において濃く書き直すとい作品になりそうな気がする。

「一粒の涙」(近藤幹夫)には、織物零細工場の悲哀が深く描かれていて、時代の変遷の陰に沈む人の思いが、よく綴られている。慣れ親しんだ織り機が解体されて運び去られるとき、それへの愛着が一粒の涙となることは納得できるが、それが小説のタイトルそのものになるということには、ズレがある気がする。むしろ「織り機」とかいう題のほうがよかつたかもしれない。

長い人生を振り返ると、遺すべきこと、書き記しておかなければならないことはいろいろあると思う。表現を鍛えて、真に光を与えて永い命を残すことは、意味のあることだと信じている。

復活の手応え

八寛正大



今夏も、猛暑酷暑、朝起きるとまた猛暑と、ダメ押しのように暑かった。秋も短く冬も年を越して二月あたり結構極寒になる。春はすぐさま花粉に襲来され、日本の気候に穏やかな四季は消え、尖った夏と凹んだ

冬の間で、辛うじて初夏辺りだけが生彩を残している感じだ……マスコミ、そしてスマホに侵食され、その味わい、機微、香りや暖かみといった「言葉のもつ中枢神経への寄り沿いと機能」が失われつつある昨今、季節と言葉は内外で繋がっているかのように思えたりする。

さて、しばしの休止を経てこの賞が復活したことは、実に喜ばしいことである。四十五歳以上の応募基準が四十歳以上となり少し若返ったが、上限はない。過去の経歴をどれだけ掘り起こせるかという、「記憶想起力」「メタ認知力」などこれからの高齢化社会に大きく望まれるものではないか。還暦までの人生に対し、そこから終焉までの二周目の人生こそ、「言葉」を駆使して豊かに生き、創り直せる人

れる。

当選作「最後の帰郷」

太平洋戦争で亡くなった兄へのレクイエムの作品である。三部に分かれていて、特に臨場感のある回想的な一が読めた。兄は十七歳で予科練を志願し、当時の海軍航空隊に入隊。そして一年ぶりに故郷に帰って来た時の話である。出迎える家族の何とも言えない待ち受ける姿勢のエピソード、一時帰還した《兄の身体からは、今まで嗅いだことのない微かな匂いが漂ってきた。昔の兄の匂いではない……これが海軍の匂いなのだろうか》という表現。取っておかれた熟しすぎた柿を兄が食べる所、そして戦闘爆撃機としてのゼロ戦に乗った空からの光景の話、銃剣術大会の快挙、思い出の木馬に乗った時のこと……死を覚悟しつつ、故郷に帰った命の一瞬の輝きが美しくも切ない。

視点の変化、二の資料的な羅列などはあるものの、戦後七十年さらに半ばまで来た現在、元号も変わったこの年にこのような瑞々しい記憶が残されていることは感動に値すると思う。

優秀作「銀色の虫」

朝からずっと、ベッドの上で窓外を見ている老人。それが現在と過去の回想を混ぜながら、なかなか良く描けている。それを象徴する言葉が良い。《その戸惑いは、「ああッ」や「馬鹿だった」というセリフを伴う、意識の過去への跳

生ではないか。そこに人間の智慧が問われるのではないか。もう一つ理屈を述べておきたい。「個」と「集団」（その大小に関わらず）という二つの属性の中で生きる人間は、その視点を二つ持たざるを得ないと思う。一つは、身体も含めた「集団の中の己」として。もう一つは個として全て己の脳に収めた「己の中の集団」としてだ。「選者の中の己」と「己の中の選評」。文学は、後者だけ……などと言うのは幻想で、実はそのバランスで結果は決まっていってしまうのだ、という事実を踏まえておきたい。つまり結果と己の選評とは一致していない部分が多々あるということでもある（笑）。

当選作「向日葵」

出だしが、なかなか鮮烈な感じだ。何かの手術が終わった後、そこから少しずつ世界が広がりが直していく描写、癒えて行く主人公……病院の内部なども良く描かれている。食べることでできない少女に母親が気を使い隠れて食べるシーンなど臨場感がある。つまり事故で内臓を痛め死の境を彷徨った状況の描写は評価に値する。その意味で文学として成立した作品ではあると思う。ただ、終わり近く、五十年が過ぎた今——が、よく伝わって来ない。さまざまな問題に攻め立てられたというのは、具体的にどんなことだったのだろうか。それがどれだけ「その後」の描写として描かれるか、説得力をもつか、難しい所ではあると思わ

躍のときと同じように、銀の虫たちの出現に繋がっていた」と。そして知人が小さな穴から入っていき出て来ないということに訴えるのだが、信じてもらえない悔しさで終わる。記憶を想起する切っ掛けは、かの偉大な文豪の専売特許ではない。

優秀作「クチボソ暮色」

深い小説だ。何か心理描写を旨とした、かつてのフランス映画を観るような感覚だった。子どももない、共に仕事も辞めた黄昏の夫婦、彼らが水族館を散策する中で心理描写。幼児連れの家族との関わりがちよっとしたドラマとなつて臨場感を感じさせる。かなり質の高い文学とは思われる、と共に状況に共感していくにはどこか特異なシチュエーションのような気もした。

優秀作「再出発」

六十歳の定年を機に妻と分かれて孤島に住んだ男の話。クラス会などもあり、《みんな思いのたけを言い合うと元気になるのだ。明日のパワーが湧いてくる》というところなど、実感をもって賛同できる。身寄りのなくなった主人公に、かつての同級生の女性がすんなり保証人になってくれる。破綻のない、明るい「ある老年」を描いた良作である。優秀作「キム・ジョンウン先生、革命の日は近いようです」

筆力は認められる作品。祖母の死や、大学での講義のころなど今的な感覚は伝わり、発音すると主人公の名前は

「キム・ジョンウン」となること、ラストの女性同士の結婚式など、飛んでいる感はある。喜劇的、風刺的？な感覚もありそうだが、現実の世界情勢との対比の中では読み切れなかった。

奨励賞「檸檬の木のある風景画」

老年のアイデンティティの追求と言える小説。妻と別居に同意し、《私は、私であることを証明するものを何一つ身に着けていない》と気づく。また知人の個展で、《あえて果実を描き入れなかった画家の意図を明確に理解する》と。ラストは生きる意味を失い自殺を仄めかし衝撃的ではあるのだが、少し「振り」の臭いもした。

奨励賞「鬻」

これは面白い、どこかミステリアスな感覚のある小説だった。鬻ぐという言葉も久しぶりに触れた。ラストラされ清掃会社の契約社員になった主人公。特別養護老人ホームでの勤務。そこで出逢った傾聴ボランティアと思われた高齢の女性たちは、ある意味、入居老人向けの売春組織の人たちだった。主人公は割の良いその仕事に男性として加わろうとし、老女たちに試されるようにのしかかられる……。そのラストがどこかボルノチックになってしまい、惜しかった。発想も面白く読ませるものではあったが、もう一つ人間の命に触れる所までを読みたかった。

奨励賞「幻想家族」

作品だ。夕刊スポーツの営業局へ入社したほとと村岡、その二人が黒木綾香という憧れの女性記者を挟んで（といっても交流は少ないが）、様々な社内での出来事に遭遇する。また村岡の敬愛する吉田松陰のことが描かれ、ラスト、三様の人生の到達点が描かれる。文にちよつとタブリがあり、構成は必ずしも斬新とはいえないが、でも読ませた。人はみなそれぞれに、「己が属した青春」を持ち、それを「己の中の青春」として回想する。

「ロング・グッドバイ」

小さい頃やけどをし、そのコンプレックスを持つ男性の話。山男となり、凍傷で指も失ったりする。だが後半、親の介護に奔走することになる。シチュエーションは面白く、なかなか良く描けているとは思われつつ、時代考証のような個所は取って付けた感もあり、小説の構成を再考されることかと。

「ねえちゃん」

《僕には母が二人いたようなものである》と、この言葉に象徴されるように、歳の離れた主人公を慈しんでくれた、今や二人だけになってしまった老いた姉への渾身の思いが伝わって来る。特に、義兄と三人の時の会話、「姉ちゃんはなんで大浦小町とか言われとると？」と無邪気に僕が言うシーンなど秀逸。

「今井秀二の手記 暗路」

義父から性的虐待を受けた中三女子を取り巻く話。実録的な意味はあると思われるし、適度にそれは良く描かれている。しかし、ラストの母親の善人への変身はリアリティがない。小説としてはまだ未完成と感じられる。

奨励賞「いいね！」

退職後の男性がSNSで昔の女性と少し関係が蘇ったりするが、交通事故なども経て、今の妻を見直す話。

他に印象に残った作品。

「那覇離愁」

旅行会社の男性が主人公。沖縄那覇に単身赴任し、遊ぶぞうと力んだものの、翻弄される話。その時期の沖縄が良く描けている。国際通り、激戦地、教育……。《沖縄にいたる思いで来てみたら天国であった》。そして遊ぼうと思つた相手が男の子を連れてやってきた……。ラストが良い。この主人公、ひいては作者の人生の、ある高揚した時代を見事に回想し描けている。選評会では、沖縄、台湾、その他現地をもつと深く描いてきたものはある……。という意見があった。しかし、比較ではないと思う。この作者にとつて、この小説を書き切つた意味は大きく、また時代も主人公と共にあつたのだ。

「村岡はほくに」

これも作者にとつて大きな意味があつたのではと思える

かつて郷党の秀才と言われつつ自死した？ 兄のことが淡々と描かれている。レクイエムとさえ言えないほどの暗さ、追いつめられていく兄やその父親との関係、その他……。これも文学だからこそ、描けたのかもしれない。

「最後の敵」

秀吉の一生。数多書かれてきたものをなぜ？ と思いつつ、文の整つた流れが美しいと感じられた。秀吉の信長を観る目と、市へ溺れなかつた抑制のところが読めた。

「ビーの約束」

享年十八歳まで生きた愛犬への思いに貫かれている。

「血と土と」

豊後（大分県）のかつてあつた一揆のことが迫力をもつて描かれている。

「くしゃみ」

ちよつと謎めいた感はあるが、認知症が進んでいく女性の側からの周囲・関係への関わりを鋭い感覚で描いている。

「春夫さんの花火」

ハンセン病の主人公とその取材に来た女性記者との関わり。

言葉を介して作者たちが思いを込め、身を削つて描いた小説の数々にこうして出逢えた。そこに費やされた《膨大な時間》に敬意を表しつつ筆をおきたい。

選考を終えて

小浜清志



人は何故小説を書くのだろう。私は演劇にのめり込んでいた頃いつも言葉に打ちのめされていた。自らのイメージを役者に伝えるために言葉を使うしかないが、その言葉は比喩や暗喩にとどまり、うまく伝わらない苛立ちをいつも持っていた。それは自らの言葉使いの挫折となり、演劇を去った記憶がある。イメージが明確になつていなかったかもしれない。それを伝える言葉が稚拙であつたかもしれないが、大きな傷として今も残っている。演劇を辞めて十余年で新人賞をとれたのは自らの描くイメージをどれだけ文字化できるかを悩んできた結果だと思う。人間は誰もいろいろと想像することができる。しかし、その想像をどう表現するかが小説の世界でも重要なことの一つであろう。

今回の応募作を読んでみて、表現の方法に工夫が足りない作品が多かつたと思えてならない。中村淳一「春夫さんの花火」においても、重いテーマを扱っていながら話がありまらにも平板になりすぎている。着眼点の良さを生かしき

れなかつた。

南理維「最後の敵」、歴史とは変えることのない事実であるのだが、これを小説という形に入れるためにはかなりの計算が必要で、且つ作者の洞察力に負うものが大きいだろう。そうでなければ読者を納得させることはできない。

牧康子「いいね!」、定年後の過ごし方をベースにした軽妙な筆づかいは好感はもてるが、作者が楽しんでるよううで読み手は置き去りにされている。

山本憲明「那覇離愁」、沖縄の僻地出身である私は那覇をあまり知らないのであるが、沖縄県民の歩き方、息のかたという癖をしっかりと見抜いていると思つた。しかし、表面を撫でるのではなく男と女の愛憎から見える沖縄を描いて欲しかつた。

笠置英昭「血と土―豊後杵築藩農民一揆始末―」、確かな筆力で物語の中へ引き込む力強さは圧倒的である。床下から情報を得て一揆へと進み、集団のもつ破壊力をまざまざと見せつける描写も素晴らしいが、人間の形は見えても人間そのものが見えてこない不満が残つた。

勢隆二「明日への帰還」、敗戦を迎え台湾から帰還する話であるが、父も母も亡くしまだ幼い兄弟の面倒をみながら懸命に生きる主人公の姿が美しい。作者の人間に対する眼差しが優しい。ただ戦争とは人間性をも歪めてしまう状況も生み出してしまうことをどこかで触れたなら、もつと

奥行きがでたと思うが、読後感もよくいい作品だつた。

田中豊「今井秀二の手記 暗路」、優秀な兄を持つ弟の手記である。血のもつ狂気が兄にも乗り移つたのか、ひきこもりがちになつていく姿から、いつか惨事を起こすのではないかと不安を抱く。兄が出奔し白骨となり発見される状況描写は息を呑んだ。しかし疑問が浮かぶ。兄が目指していた場所に父も向かつていたのではないか。血のもつ狂気を父がたち切つたのか。読者の想像を膨らます。

大新健一郎「霧」、ひさぐとという難しい漢字のタイトルになんとなく思いついていた事は現れず、ミステリアスな老人や担当の言動がにつき核心に迫ってくる。最後はドタバタ劇のようになつてしまふが、老人の性へのアプローチは間違っていないだろう。

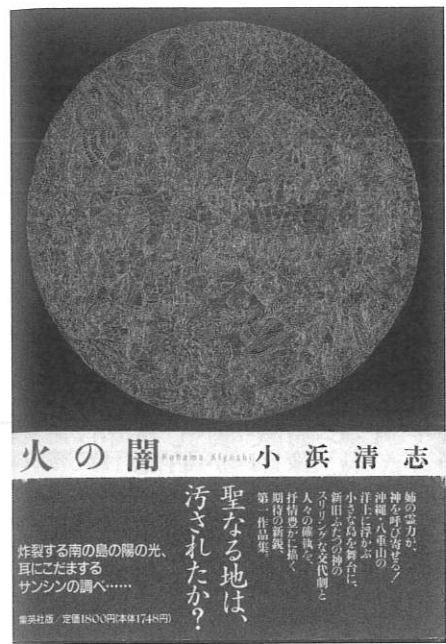
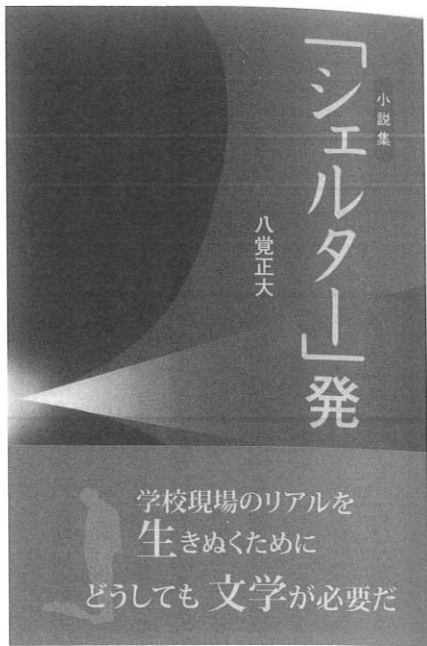
井上一志「クチボソ暮色」を私は当選作にしようと思つてしたが、意外に点数が伸びなかつた。老夫婦の来し方を近所の公園を散歩しながら振り返るというありきたりな話であるが、私は行間に詰まっている積年の情念に作者の筆力を感じた。他人の子供を勝手にあやす場面に工夫があれば、より一層傑作になつていただろう。

阿部千明「くしゃみ」、現実にもそのような人がいるのかどうかは問題ではないが、着想に関心をもつた。壊れていく老人、常人から逸脱していく過程を上手に展開している。しかし、このようなテーマを扱うのはとても難しいことだ

ろう。つまり、常人が読んで理解できない場面をどう書いていくのか、これは難問である。

倉木基志「キム・ジョンウン先生、革命の日は近いようです。」は、思わず苦笑してしまうタイトルとは真逆に、在日を扱った重いテーマである。私の知人の在日の方から色々と話を聞いているので、この問題の根は深いことがわかる。価値観の違いだけではなく人生の捉え方のぶつかりでもある。しかし、雑多な人間の衝突を超越して、同性の結婚パーティという締めは安易すぎないだろうか。同性婚にしても、それが超人と見えてしまうのは常人側からの解釈ではないだろうか。

西山慶尚「最後の帰郷」、予科練に入隊していた義行が休暇を得て一年ぶりに四国の山間にある故郷へ帰ってくる物語である。日頃の訓練から死を覚悟している義行の所作は幼い兄弟たちには眩しい。家から二キロほど離れたバス停へ、父・定義を子供たちが迎えに行く。定刻を大きく遅れて到着した義行がトランクを地面に置き、父親に敬礼をする。その悲しいまでに美しい挙措に子供たちは胸をわしづかみにされる。年末年始の五日間を家族親族、そして村人たちとの交流を描いたこの作品は、静かではあるが奥に隠された軍人の覚悟がじわりと伝わってくる。銃剣術大会で見せる義行の荒々しさは死を予感させて寂しい。戦争はこのような若者を犠牲にしてきたのである。当選に異議は



ない。
森本あさ子「向日葵」も、当選作にふさわしい作品である。自転車に乗っていないながら停車中のトラックに激突しハンドルで内臓を痛めて手術入院という闘病記である。実際に体験しただろうと思わせる病人目線の書き方にリアリティがあり、迫力もあった。異なった視線から同じテーマでもう一作書くこともおすすめしたい。当選おめでとうござ

銀華文学賞選考委員プロフィール

大高雅博 おおたか まさひろ
1954 石川県生まれ 日大国文学科卒
80「旅する前に」で群像新人長編小説賞受賞
他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥ・リメンバー」など

小浜清志 こはま きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マネージャーを務める
88 「風の河」で文学界新人賞を受賞

八覚正大 はっかく まさひろ
1952 東京生まれ
早大理工学部数学科・都立大仏文科卒
91「十二階」で新潮新人賞受賞 文藝学校・NHK 学園講師 主著『「シェルター」発』（けやき出版）『夜光の時計』（新読書社）詩集『朝一の獲物』『学校のオゾン』（共に洪水企画）

五十嵐勉 いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ 早大文芸科卒
79「流謫の島」で群像新人長編小説賞受賞
84-90 タイ在住、カンボジア問題取材「東南アジア通信」「ASIA WAVE」編集長
主著『緑の手紙』（インターネット文芸新人賞）・『鉄の光』『ノンチャン、NONGCHAN / 聖丘寺院へ』『破壊者たち』



作家集団「塊」新メンバー募集中

銀色の虫

土田ひろし

今日も恭平はベッドの上で窓の外を眺める。朝からずつと。昼食の後も。いや、ときどきは目を閉じて天井を見つめたりするけど。でも、一日の大半は眼の下に広がる光景を見て過ごす。眠くなればそのまま眠ってしまう。そんなときには、さつきまで見ていた光景の続きが夢の中に現れることがある。そのため、目が覚めてからはどこまでが現実か夢だったかがよくわからなくなり、恭平は幻惑の世界をさ迷う。

幻惑の世界では、前頭部の骨の内側が、勝手気ままに這いずり回る何百匹もの虫に占領される。羽に銀色を帯びたその虫たちはひしめき合っており、お互いの上に乗ったり押し合ったりしながら骨に圧力を加える。やがて耐えられなくなった骨は、ところどころにある隙間を広げ圧力を逃がすのだが、そのとき額の真ん中あたりに拭いても掻いても

それに七十五歳という身で、いままら健康に執着することもないだろうと思っただけもある。

肩肘を張り斜に構えたこんな姿勢は、年寄り独特の、言ってみれば老化による神経の硬直の表れなのかもしれない。もつと気楽になればいいのにと心の片隅は呟くけど、固く絡み合った神経はそう簡単にほぐれない。

テレビのほかに本を読む手もあるが、いまでは老眼鏡をかけても目が疲れるし、引き込まれるような中身がないからまったく関心がない。本棚には三十冊ほどの小説と旅の雑誌、それに国語辞典や英和辞典などがあるが、長い間埃を被ったまま引き抜かれた形跡もない。

小説の中にはカバを纏った本が数冊あるが、それらは官能小説だ。題名から一目でそれとわかるからカバで隠してある。いい歳をしていままら色気もないだろうと思われるのが嫌だし、恥ずかしさもあるからだ。官能小説は写真入りで、ずいぶん際どい光景もある。それでも七十歳前まではときどきではあるが、付箋を着けたページをめぐって見たものだ。そうやって自分の身体の反応を確かめたのである。反応は歳と共に鈍くなり遂にはピクリともしなくなつて、これらの本への関心は消え失せた。

こうしていまは、窓の外を見下ろして過ごす以外にやることがない。しかしこれが結構面白い。眼下には、商店街の入り口と地下街への昇降口、そしてその端を横切つて走

もとれないむず痒さが現れる。それをひたすら掻いていると、やがて内側の虫たちも元気を失って動きを止める。そして覚醒というか正気に戻るのである。戻ったら再び窓の外へ視線を移す。恭平はこの行為を終日繰り返す。

ベッドの足先にはテレビがある。しかし最近朝昼晩のニュース以外は見ない。昼間の番組はどのチャンネルでも同じ話題をもんじゃ焼きのように具と味付けを変えて無理やり口へねじ込んでくるようで辟易するし、夜は夜で薄っぺらなお笑いか、モヤシみたいな若者たちのヘナヘナ歌と、これでもかと情報のしぶきを浴びせかける健康番組に埋め尽くされるからだ。

健康番組もしばらくの間は参考になるかなと思つて関心を持つたけど、あまりにも多くて雑多な情報に翻弄された挙句、どれが正しいか理解できなくなり観ないことにした。

る広い道路がある。地下街と言っても、その道路の下をくぐる三十メートルほどの通路に八軒の店舗があるだけの小規模なものなのだ。

人の流れは一日を通して大きく変化し、朝は地下街や広い道路脇の歩道から集まってくる人たちが、商店街のゲートに箒の穂先を束ねるように吸い込まれていく。商店街の先がJRの駅に繋がっているからだ。夕方になるとこの流れは逆になる。しかし昼間には、土曜日や日曜日でないかぎり人影はまばらとなる。

面白いのはこの流れに乗って動く人々の表情だ。流れそのものも溪谷を下る水のように変化があつて興味深い、人々の表情は内面の感情を曝け出すこともあつてなお面白い。

いま商店街のアーチをくぐつて出てきた人はお茶屋の隠居だ。決まった時間に東側商店街を一回りする。杖を突いているのに肩を怒らせて。その癖は子供のころから変わらない。西側商店街へ行くには地下街を潜らなければならぬから、足の悪い隠居はここで引き返す。この人、中学のころまでこのあたりの番長だった。隣の町内とはよく喧嘩をしたが、常に先頭に立って渡り合つた。背は低いが気が強く腕つぶしもあつて頼もしかった。

二つ年下だった恭平も彼の後ろにへっぴり腰でくつつき、棒を振り回したものだ。いまま肩を怒らせて歩く格好はそ

の頃の遺産なのだろう。番長であった意識がいまだに黄昏がれた身体から滲みだしているようだ。

隠居は二年前に店を息子に譲った後しばらくしてから様子がおかしくなった。道で会って挨拶しても怪訝な顔をされたり、逆に満面に笑みを浮かべ会釈されたりでこちらを大いに戸惑わせた。さらに、服装も乱れ、シャツのボタンを掛け違っていたり、ズボンのチャックが開いたままだったりして、それはもう隠居が完全にボケの領域に入り込んだことを窺わせた。それでも肩を怒らせるくせは抜けないように、その姿はシーソーに足が生えて歩く様に似て、行き交う人たちの奇異に満ちた視線を集めた。

それから一年余りが過ぎたところ、隠居に決定的な出来事が起きた。年末を迎えた夕方、行方が分からなくなったのである。夕食どきなつて部屋にいないことに気付いた家族は商店街を走り回ったが発見できず、果ては隣近所だけではなく商店街を挙げての捜索となった。しかし何の手掛かりもなく、結局は市の同報無線での尋ね人となった。

その効果があつて、隠居は深夜に商店街から三キロも離れた二十四時間営業のスーパーマーケットのトイレで発見された。足の悪い身でよくそこまで歩いて行ったものだと誰もが感心したが、徘徊する人にも何らかの目的があるのだらうと、恭平もそのときには思ったものである。その後、隠居の徘徊は何回かあつたが、いずれも未遂に終わつてい

だが歩くことはできた。ただし、歩行補助具があればである。そんな中でも幸いだったのは、判断力や記憶力がそれほど落ちていないことだった。落ちていないと言つても歳相応か、それよりも少しばかり悪くなった程度だと恭平は思っている。いや、敢えてそう思おうとしているのかもしれないが、それはあくまで自己判断だから周りが見えてるか恭平にはわからない。

身体の後遺症については入院中からリハビリに励んだが、いまの状態までの回復が限界だった。だからもうあきらめた。あと何年生きられるかわからないのに、いまさらつらい思いはゴメンだと、楽に流れる気持ちに乗つかつて言い訳をしている。それでも息子の強い勧めで在宅リハビリだけは続けている。週に一回、トレーナーがやってきてマッサージや歩行訓練を行ってくれるのだ。これには機能の回復のためというよりは、退屈な生活を紛らわせる上でのメリットがある、とそのときは思ったのだが、いまは大きな楽しみになっていた。

理由はまことに生臭く、トレーナーが若い女の子だったからである。若いと言つても三十代前半。しかし自分の歳の半分にも達しないから、子供よりも若く孫よりも年上となる。この中途半端なところが、血の繋がった者同士にはない妙な緊張感を生むから不思議だ。いい歳をして何よ、とは思うが、彼女の手が身体に触れるたびに緊張と恥ずか

る。家族が本人にはわからないところにGPSを取りつけたからであつた。

地下街の降り口で立ち止まった隠居は、今日もキョロキョロと周りを見回すとシーソー状態となつて東側商店街へ戻っていく。そんな姿を目の当たりにするとき、恭平はいまの自分と比較しホツとする。ろくに歩くことができないうという身体の障害はあつても、精神は正常であると思うからだ。ボケていなければ、身体の不自由さは人の助けや歩行補助具を使えばなんとかなる。つまり正常な世界に住み続けることができるのだ。

この部屋に閉じこもるようになったのはおおよそ一年前。左半身が思うとおりに動かなくなったのである。原因は脳梗塞だった。それは町内会からの帰り道で起きた。家に帰りつく五十メートルほど手前のクリスマスツリーの下で突然激しい頭痛に襲われ、意識を失つたのだ。その後のことは覚えていない。おぼろげだが意識が戻つたのは集中治療室の中だった。体に繋がれたたくさんの管と計器、口を覆うマスク。誰かが覗き込んで声をかけた。そのとき白衣がちらりと見えたから、まだこの世にいることは理解できた。

しかし後遺症が残つた。左半身の動作が指示に反応してくれない。反応しても指示量に対して忠実でない。つまり思いどおりになつてくれないのである。しかし、ヨタヨタしさを覚え、赤らんでくる顔を隠しきれない自分がある。みつともないと思ふげだ。

彼女がやってくる毎週水曜日の朝は早く目が覚める。髭をいつもより念入りに剃つて毛髪も丁寧に撫でつける。毛髪と言つても白と黒が入り混じつた過疎状態だから、撫でつけるとまさにバーコード状になるけど、何回も時間をかけて櫛ですく。しかし、そうすることで毛が増えてくるわけでもないから、結局はあきらめて櫛を置くことになる。次のリハビリは五日後。カレンダーに付けられた赤い丸が鮮やかだ。

恭平の居住空間はほとんど二階に限られている。同じフロアにトイレや風呂もそしてキッチンもあつて、日常の行動は歩行補助具を使えば何とかこなせるからだ。二階に生活のためのユーティリティが整っているのは一階が店舗だからである。いや、正確に言えば店舗だったから。三年前までは。

一階へ降りるのは月に一回で、医者へ行くときぐらいしかない。しかしこれが大仕事だ。息子の嫁に助けられながら尻を滑らせ階段を芋虫みたいにすり降りる。そこから脇を支えられ、虚空を掴む格好で車に乗り移るといふ具合だ。逆に階段を上るときは後ろ向きになって尻から登るアトズサリ型尺取虫となる。この姿、何とも情けないし苦痛を伴う。苦痛の元はお尻だ。歳をとつて肉が減っている

ところへきて、ベッド生活で身体を動かさないものだから、クッションの働きはないに等しい。そのため、医者通いは苦痛極まりない。

でも行かなければならない。息子の敵命だから。医者へ行かないでこのまま放っておいたら、目が見えなくなり足が腐ってくるよと脅かされる。医者からも、それを受け売りする息子からも。脅しだろうとは思うけど。

高血糖は七年ほど前にみつかった。真正正銘の糖尿病と診断され、投薬に加えて食事制限と適度な運動が医者から指示された。しかし指示どおりにはいかず恭平は厄介な患者であり続けていた。酒好きな上に運動嫌いときては数値がよくなるはずがなかった。

妻が健在だった頃にはコントロールも効いたが、いまはあやふやな自制心しかない。中でも運動は大の苦手で、商売をやっていたときでも少なかつたものが、やめてからはさらに減少し、二階に閉じこもる現在に至ってはほとんどゼロの状態にある。このため数値はどんどん悪くなり、来月からは腹にインスリンとやらの注射を打つことになってしまった。

もう七十五歳にまでなったのだからいまさらとは思うが、目が見えなくなったり足を切られるなどと脅かされるとやはり怖い。手で空を切りながら物を探したり、足がなく床に転がる自分を想像すると身がすくむ。

「新聞にもちよくちよく載ったからね、私の写真が。おかげで靴もよく売れたよ。私目当てにきてくれたのさ」とバアサンは鼻を膨らませると、次は一転し「いまはチェーン店やスポーツ店にとられちゃって散々さ」と、皺くちゃの顔をしかめ「昔はよかつたよ」で締めくくるのである。

この話が、会うたびに出来るものだから聞くほうはたまらない。恭平もいまは外へ出ないからバアサンに会うことはないが、この病気になる前はたびたびその餌食になったものだ。同じ話を繰り返すのはボケの兆候だとも言われるから、そうはなりたくないとはバアサンの姿を見るたびに思う。

靴屋のバアサンの後に現れた菓子屋の昌さんは、お茶屋の隠居とは逆に大きな図体だが気が弱かつた。二人の性格の差なのだろう、お茶屋の隠居は昌さんをちよくちよくいじめた。それもあつてか、昌さんはいまだに隠居にペコペコしている。ボケてきた隠居に対してそんなのだから、昌さんもひよつとしたら同じ領域に足を踏み入れてしまったのだろうか。

この三人のほかにも、見た顔が通るけど名前が思い浮かばない。商店街の人であることはわかるが、記憶の引き出しがどうしても開かない。中には入っているのだからうけど。これとは反対に、思い出そうとしないのに突然引き出しが開いてしまうときがある。この現象は最近になり多く現れ

眼下にはお茶屋の隠居のほかにも昔馴染みが登場する。

靴屋のバアサンもブードル犬を連れ朝の決まった時間に姿を現し、こちらの視界を横切っていく。このバアサン、若いころはヤンチャだつた。チリチリにパーマをかけロングスカートに革ジャン姿で、若い男たちと駅の広場にたむろしていた光景が、いまは腰をかがめチョコチョコ歩き姿にダブって見える。何ともおかしい。思わず吹き出してしまふ。

チョコチョコ歩きは老化の象徴の一つと言われるが、そのほかにも彼女には周りを辟易させる言動があつた。同じ話を何度も口にするのだ。その接頭語が「昔はよかつたよ」である。中でも、織姫の話は繰り返し彼女の口に入る。「三年も続けたのよ、織姫役を。あんたしかいないからって口説かれてね」

もう何十年も昔の、バアサンが若かつたころの話である。そのころ商店街は季節に応じ華やかにイベントを催した。七夕祭りもその一つで、色鮮やかな飾りを商店街が埋まるほど取りつけ買い物客を集めた。織姫が登場するのは天の川行列というパレードで、きらびやかなモールで飾りつけられた人力車に織姫役と彦星役が羽衣様の衣装をまとい、その後を星たちがぞろぞろとついて歩くのである。恭平も星の役を何回かやつた。

るようになっていく。二日ばかり前もそうだった。

その日の昼下がりに、恭平の目に地下街への階段の前で立ち止まっている喪服の男女が映つた。降りていくかどうか迷っているようだった。遠目ではあるが顔つきから見て若くはない。たぶん葬儀からの帰りなのだろう。どこかで昼食を摂ろうとしているのか。何事か言葉を交わした二人はしばらくすると地下道への階段に向かって踏み出した。

そのときだった。横から現れた一人の女が二人の前に立ち塞がり、男に向かって話しかけた。いきなりという感じだ。戸惑う二人。すぐに男の身体が大きく揺れた。とても驚いた様子だ。男は二人の女の間で顔を左右に振っている。思いがけない出会いだったのかもしれない。その光景が恭平の記憶の引き出しを突然開けた。

結婚して五年が経つた頃だった。仲人の親が亡くなった通夜るとき、受付を済ませロビーに佇んでいると、恭平夫婦の前に一人の女が立ち「お元気そうね」と声を潜めるように言った。洋子だった。彼女とは妻と一緒にいる前に付き合っていた。寝たこともある。しかし結婚して生活を共にする気持ちはなかつた。お互いにであった。

突然の出来事だつた。驚きを隠せない恭平に妻は小声で「どなた？」とたずねた。狼狽えた。妻の顔色が変わつた。恭平は思わず「ああっ」と叫んだ。そして「馬鹿だつた」と叫びた。しかし「ああっ」と声を上げたのは昔の恭平で

はなかった。「馬鹿だった」と呻いたのもそのときの恭平ではなかった。狼狽したのはベッドに座っているいまの恭平であつた。思わず枕元にある仏壇に目を遣つた。そこには妻の位牌があつた。窓から射し込む光をかすかに弾いてこちらを見ていた。恭平は思わず唾を飲み込み目を伏せた。一週間ほど前にも記憶の引き出しは突然開き、恭平の口から同じ叫びと呻きを吐き出させた。それは手を繋いで商店街へ入っていく若い男女を見たときだった。その姿にダブつて、恭平の脳裏にまだ学生だった自分が浮かんだ。それは右手で女の肩を抱いた姿であつた。学生という身分を忘れ夢中になって通つたダンスホール。そこで口説いた年上の女を連れてやってきた公園で、男としての次の手が打てない。キスさえできない。ましてや押し倒すことなんて。相手は明らかに受け入れようとしてゐるのに。

明らかな経験不足、度胸不足。まるで、追いつめた獲物を前にどうやって仕留めるかわからないまま立ちすくむ若いオオカミだった。肩を抱いたまま無言の時間が流れると、やがて女は恭平の手を解いて立ち上がり、一瞥して立ち去つた。残つたのは惨めさと歯がゆさ。記憶がそこにまで遡つたとき、例の叫びと呻きが恭平の口を突いて出た。

十日ほど前の夜更けに、地下街の入り口で仰向けに倒れこんでいる酔っぱらいの姿が目にしたときもそうだった。脱げかかった背広。捲れ上がったズボンの裾。モップのよ

こもつてから頻繁になつたように感じる。でもこれらは単なる意識の過去への跳躍であつて、ないことをあるように感じる妄想ではないから、正常な精神の領域の内での現象であると恭平は思うようにしている。

窓際にあるベッドは電動式で、スイッチ一つで上半身を起こせる。そのためカーテンを開ければ、寝たままでも外の景色を見下ろすことができる。このベッド、息子も嫁も言わないが、相当高かつたらしい。上半身が起こせるだけでなく足も上げ下げが可能で、高さも調整できる複雑な構造だからだ。

先の長くもない親にずいぶんお金をかけたものだと思つてはみるが、やはりありがたい。操作するたびに息子たちの気持ち伝はつてくる。しかし、これに慣れるまでが一苦勞だった。第一、危険極まりない。顔や手をベッドの横にある落下防止柵から出したまま操作するとギロチンのように挟まれてしまうし、下へ落としたものを拾おうとして体をつまむとプレスに転じてしまう。最近ではどうやら慣れたものの、この慣れが恐ろしい。つまり思い込みだ。年寄りには特に多い間違つた思い込みである。

三度の食事は、廊下の突き当たりにあるダイニングキッチンまで歩行補助具を押しいき、摂る。嫁は部屋まで運ぶと言つてくれたが、息子は運動になるから少しでも歩い

うに乱れた頭髪。通りかかった人も顔をそむけていく。街灯の下のその惨めな光景は、まだ若かつたころの自分の見苦しい姿と重なり、またしても恭平に「あぁッ」「馬鹿だった」と口走らせたのだった。

呼び起こされた記憶は、駅の近くにある小料理屋で開かれた商店組合の忘年会から始まつた。若手として幹事役を仰せつかつた恭平は、酔つ払わないことを心に誓つて臨んだのに、意思とは逆に杯を運ぶ手に逆らえず脳は屈服。二軒目のスナックで脳はさらに麻痺を深め、三軒目以降は全身麻痺状態に陥つた。後日聞いたところでは、そんな状態で商店街の横町にある馴染みの居酒屋に寄り込み、おだを上げたらしい。家からは歩いて五分ほどだったこともあつて、緩んでいた気がさらに緩んだようだった。居酒屋からの連絡で迎えに来た妻から、信号機の下でシャツのボタンを引きちぎり大の字になつていた醜態ぶりを、翌朝、二日酔いの中で聞かされ身が縮まつた。

現在のふとした光景がなぜ遠い昔の出来事を想起させるのか。しかも恥ずかしい思い出ばかりだ。そんなときにも例の銀色の虫たちが前頭部の骨の内側に現れる。幻想の世界に迷い込んだときほど多くはないが数十匹はいる。そして、額の真ん中あたりにしつこいむず痒さが現れるのである。

過去の出来事が突然蘇つてくる現象は、この部屋に閉じ

たほうがよいと反対した。従つて、歩くのは一日に数回のトイレ通いと食事の機会、それに週二回の入浴と月一回の医者通い、そして週一回のリハビリのときしかない。必然的に足の筋肉はやせ細りお尻の肉もそぎ落とされ、風呂の鏡で見る姿には思わず目を背けてしまう。

そのため椅子には座れない。いくら柔らかいと言つても体重が骨に直接かかつてしまうからだ。その点、ベッドはマットと敷布団がダブルでお尻をいたわつてくれるので苦痛はない。それに疲れたらそのまま横になつていけばよいし、眠くなつたら目を閉じればよいから、枯れ木のような身体にはまことに優しいのである。

妻の死は突然だった。二年ほど前の日曜日の朝、いつまでたつても起きてこないいで部屋を覗いたところ、上布団を跳ねのけ海老のように身体を折り曲げた妻の姿が目飛び込んだ。すぐに呼びかけたが返事がない。悪い予感がした。慌てて駆け寄り空に突き出した手に触れる。かすかな温もりはあつた。口元に耳を近づけ呼吸の音を聞こうとした。引きちぎるようにパジャマの胸元を開け胸の動きを見る。しかし音も動きもなかった。恭平は大声で息子を呼んだ。

救急車が来るまで、母親の胸元を押し続ける息子を見ながら思った。このまま蘇生しなければ紛れもないピンピン

コロリだ。七十二歳は短くはない。人生をこんなに簡単に終えることができるなんて極上かもしれない。人の羨む幕引きだ。見てみる、あの顔を。頬が緩んでいる。口元は柔らかなだ。顔はそのときの心を表わすと聞く。そうだとすれば妻は極上の最中にあるのだろうか。いまは三途の川岸から鮮やかな色彩を散りばめて光り輝く浄土を眺め、胸をときめかしているのかもしれない。それとも、もう渡り終えようとしているのか。

そのときだった。「最高だよ」と、低いがはつきりとした言葉が恭平の口をついて出た。息子が一瞬手を止め驚いた表情で恭平を振り返った。しかし恭平は妻の顔を見つめたまま動かない。その顔に極楽を見ながら動かない。

「父さん！」

息子が声を震わせた。強い語調に恭平の気持ち揺れた。しかしなぜ揺れたのかわからない。そのときの「最高だよ」という言葉は妻の死を貶めるものではなく、むしろ羨む気持ちを表わしたものだだったのに。

このころから、目の前で起こっている状況とは少しづれた思いが、突然のように頭に入り込むことが多くなっていった。葬儀が終わった夜、息子からいつ納骨をするか相談を受けたときもそうだった。息子の話の途中で、恭平の脳裏に一本の楠の木が忽然と浮かんだ。青々と葉を繁らせたその木は南への視界を遮り、墓地からの眺望を台なしにして

ていたのだ。そこで、商店街組合は手を打った。行政に働きかけ、道路の下に通路を作らせたのである。これで信号待ちをすることなく、人の流れを西側商店街に導くことができる。そう踏んだのだ。地下通路には両側に八軒の店を作った。喫茶店やラーメン屋、弁当屋、それにすし屋など食いの屋が半分を占める。これは、味と匂いで誘い込むという戦略だったようだ。そのほかに魚屋、花屋、時計店、床屋があった。オープン時、この地下道商店街は大きな話題になった。と言うのも、道路の下に横断通路を兼ねて地下街を作るというユニークな発想が、世間の関心を広く呼び集めたからだだった。

しかし、二十年后に状況は一変した。郊外に大きな道路が開通したのだ。その道沿いには広い駐車場付の大型店舗が次々とでき、人々の足はそこへと集まっていた。その結果、商店街を貫くいままでの道路の交通量は激減することになった。こうなると必然的に賑わいも減り、とくに西側商店街の凋落は目を覆うほどであった。

西側商店街の端にあった恭平の文具店もその煽りを食らって売り上げが半減した。自前の店舗だったからテナント料はかからなかったけど、それでも赤字を免れなかった。そんな状態で何年かを食い繋いだ後、恭平は店を閉じることを決めた。一人息子はサラリーマンで後を継ぐ意思などなかったし、七十歳を過ぎていて、体力的にも気力の

いた。あれがなければ妻が好きだった海が一望できる。楠の木は墓地の南面に立ちはだかつて陽光さえも遮っていた。「この木がなければ海が見えるのに。お義父さんもお義母さんも海が好きだったから、きつと残念に思っているわ」妻が墓参りの度に口にした言葉である。しかし、いちばん残念に思っていたのは妻だったと恭平は見ている。それなのに、その墓に骨を納めなければならぬ。あの木がなければ妻も満足して眠ることができるに違いないのに。恭平は思わず「切ってしまうか」と叫んだ。すぐさま息子と嫁が顔を見合わせた。恭平が突然発した場違いな言葉に驚いたのだ。「切ってしまう」とは何のことだろう。父の意味不明な言葉にその場の空気が固まった。こんなちぐはぐな場面は最近でもあった。

「今年三年ぶりに七夕祭りをやるそうですよ」

嫁の言葉に恭平の頬が緩んだ。

「このあたりで元気をつけてジリ貧を止めなけりゃって、会長さんがおっしゃっていたわ。シャッターばかり増えたんじゃないでしょうか」

昔、商店街は駅からの乗降客の流れを掴んで賑わっていた。ただし、それは商店街の東側だけ。西側はそこを横断する広い道路によって人の流れが絞られていた。信号機付きの横断歩道はあったけど、待ち時間が長いいため、その前で引き返す人も多く、西側に十分な流れを呼び込めない

上でも限界を感じていたからであった。西側商店街の凋落は、必然的に地下街の存在価値を大きく損なうことになった。その結果、閉鎖の議論が行政から持ち上がったのである。いまから一年ほど前のことであった。世の中の急激な変化に翻弄された駅前商店街。恭平の頭をその残酷な移り変わりが駆け巡った。

「酷いもんだ」

吐き捨てるような恭平の言葉。嫁の顔に戸惑いの色が強く浮かんだ。話がまったく噛み合っていない。七夕祭りが酷いってどういうことなのか。しかしそう聞かされた。いま、義父の頭の中はどうなっているのだろう。嫁はその理由を聞くこととしてやめた。眉間に皺を寄せ下唇を噛んだ義父の顔があまりにも険しかったからである。

このように、その場の状況にまったく合わないセリフが息子たちを戸惑わせる場面がたびたび起きていたが、恭平に違和感はなかった。自分の中では、それなりに筋が通っていたからである。しかし、息子たちがそのときに見せる大きな反応には戸惑った。

そしてその戸惑いは、「ああっ」や「馬鹿だった」というセリフを伴う。意識の過去への跳躍のときと同じように、銀色の虫たちの出現に繋がっていた。

最近の物忘れはとどまるところを知らない。向こう三軒

両隣の名前が思い出せない、どこに何を置いたかを忘れてしまう、などはまだよいとして、たったいまやったことを忘れてしまい呆然とする。さつきトイレから出てきたのに、また行こうとする。薬を飲んだばかりなのに、また飲むとする。

生活のほとんどがベッドの上になってしまっただけから、このようなものが頻繁になっていった。でも、ミスに気がつくだけマシだと恭平は思っている。認知症になると自分が犯したミスさえ忘れてしまうというから、自分はまだまだ大丈夫、まともな部類にいるのだ、と恭平は半ば無理矢理に自分を納得させていた。

いまやこの電動ベッドは恭平のコックピットだ。枕元には、手の届く範囲に木製のショーケース、これは店から運び上げたもの、があつて、その棚にエアコンやテレビそして天井灯のリモコン、マグボトル、手振りの鈴などが置かれてある。老眼鏡と近視眼鏡もその上段の棚にあるし、枕元のライトも手を少し伸ばせばオンオフできる。もちろん電動ベッドのリモコンもだ。これらすべてが自由の利く右手が届く範囲にある。

マグボトルには朝と夜、そのときの状況、つまり季節や気温に応じて温かいお茶や冷たいお茶が入っている。息子の嫁の気遣いで、これはありがたいいつも思う。でも、このマグボトルというハイカラな容器は使いにくい。最初

めた日の朝であつた。広い道路を挟む東西の商店街の端で工事が始まったのである。最初はそこに何ができるのかわからなかつたが、一週間後に姿を現したのは信号機であつた。東西両端を結ぶ道路には横断歩道のマークも描かれ、人の流れが地下から地上に変わることが明確に示された。地下街の出入り口は赤い三角コーンと柵によつて塞がれ、人々は地上の横断歩道へ導かれることに。

今日も路肩に工事車両が停められ、コンプレッサの乾いた音がかすかに聞こえる。階段から下へ伸びるホースの束。忙しく出入りするヘルメット。運び出される建材や机、椅子。通りかかる人たちの怪訝な顔。

そんな光景を目にしたが、恭平は大きく息を吐いた。頭に健さんの歪んだ顔が浮かんだのだ。彼は地下商店街で一杯飲み屋をやっていた。奥さんと二人で。店の名前は「七転八起」。健さんは多くを語らないが、いままでやってきたいくつもの仕事があまくいかなかったから、ここで必勝を期したとのこと。最初、この店はラーメン屋だつたが、五年前、店主が健康を損ね廃業する機会に健さんがテナント権を買ったのであつた。

「財産ぜんぶつぎ込んだよ」

「それだけじゃないわ、借金もいっっぱい」

「年金も知れているし、これで食うしかないね」

「だから背水の陣で、七転八起にしたのよ」

はロックがあるのがわからず、口が開かないので嫁を呼んで開けてもらった。しかし、翌日にはもう手順を忘れてパニックだ。

それができて、今度は中身をこぼしてしまふ。あのベロみたいな飲み口が口元をさ迷い中身をまき散らす。液体はパジャマを濡らしシートに浸み込み肌を忍び入る。仕方がないから手振りの鈴を振って嫁を呼ぶが、部屋の引き戸を開ける彼女の眉間には縦皺がはつきりと。「早く覚えてくださいいね」と、言葉は優しいがその縦皺は消えない。「すまないねえ」と、弱々しい声を発する自分が情けない。こんなはずではないと思うが、頭と手が、麻痺のない右手でさえもすぐには連動しない。

木製のショーケースの斜め横には、大きくも小さくもない仏壇がひっそりと置かれてあり、恭平の両親と、二年ほど前に亡くなった妻の位牌が納めてある。寝ていても上半身を起こしても戒名が読める距離にあるのがよい。

意に沿わないこともあるけど、いまのところここはそれほど居心地の悪いところではないと恭平は思っている。身体の不自由さはあつても、頭の具合はまあまあ歳相応のはずだ。恭平は、そんなに長くはないであろうこの先を騙し騙し過ごしていけそうな気がしていた。

眼下の様子に変化の兆しがあつたのは、冬の風が吹き始

「俺も還暦過ぎたし」

「これが最後のチャンスかも」

開店した当初、健さん夫婦は笑いながら恭平にそんな軽口をたたいたが、目は笑っていないかつた。「七転八起」は、商店街の旦那衆をはじめ、国道沿いに展開する店や町工場の男たちで繁盛した。地下の隠れ家みたいな雰囲気魅力だったこともあるが、実際のところは愛想のよい奥さんが客を集めていたと言つてよい。恭平もよく通つた。居心地もよかつた。それに家から徒歩一分だから、へべれけに酔つても帰りつける安心感もあつた。

しかし、健さん夫婦の七転八起は成らなかつた。モーターリゼーションという時代の波に翻弄されたと言えはそれまでだけど、彼らにとつてその無念さはとても想像できるものではないと恭平は思つた。

階段からいくつもの椅子が運び出された。背もたれのない赤い丸椅子。「七転八起」で座り慣れた椅子だ。恭平は半身を起こし目を凝らした。しかし、その姿勢が身体に刺激を与えたのか、突然尿意を感じた。歳をとると尿意は突然やってくる。前触れなどない。しかもそれは忍耐力を持っていない。どんな仕組みなのかわからないけど待たなしたのである。恭平は急いで起き上がり、ベッドの端を掴みながら必死に歩行補助具へ身体を移した。トイレは引き戸の向こう、廊下の突き当たりであつた。

用を足して廊下へ出たときであった。少し開いたドアの向こうから話し声が聞こえた。

「ねえ、お義父さん、やっぱりおかしいわ」

恭平は思わず立ち止まった。

「どうして？」

「ときどき叫び声が聞こえるの。その後、何か知らないけどブツブツと呟くのよ」

「独り言かい？」

「だって、ほかに誰もいないもの」

ああ、あのことだと恭平は思った。眼下の風景が呼び起こす昔の出来事によって口を突いて出る「ああッ」と「馬鹿だった」。それを嫁はたびたび耳にしたのだろう。

「それだけじゃないの、同じことを何度も言うのよ」

「マグボトルのことかい？」

「それもああるけど、話の途中でまったく関係のないことを言い出すのよ」

「ああ、おふくろが倒れたときや、納骨の話ではそんなことがあったなあ」

「ほかにもいくつかあるのよ。最近では商店街の七夕祭りを三年ぶりにやるって話をしていたとき、お義父さんは『酷いもんだ』って言ったのよ。喜んでいいことなのに。私もうわげが分からなくてポカンとしちゃったわ」

「まったく繋がらないじゃないか」

「え、まだあるの？」

「お母さんの三回忌のこと」

「おやじに言われて、お寺の手配もしたよな」

「ええ、してあるわ」

「それがどうした？」

「ここ二回ほど言われたの。そろそろ三回忌をやらなければなあ。真剣な顔で」

「そんな……」

嘘だ。息子夫婦は気が利かないから言ったんだ。それも今朝初めて。何回も言ったなんて嘘に決まっている。嫁は勘違いをしている。ただの勘違いだ。

「それは違う、何言ってるんだ！」

そう叫ぼうとして、恭平はすんでのところまで自分を押しとどめた。そのことで生じる収束のつかない空気を予感したからだ。喉元まで遡る悔しさを飲み込みながら、恭平は歩行補助具のハンドルを握りしめた。

それから一か月後、地下道商店街の閉鎖工事は最終段階に入ったらしく、出入り口がコンクリートで覆われた。最終的に作業員が入り出ることができる小さな穴を除いて。この状態だと、完全な閉鎖は明日にでも行われるのかもしれない。街灯やときどき通る車のライトに照らされるのかもしれない。ラーコーンとトラ模様の棒も点滅ライトを忙しく輝かせる。

「地下街のことだってそうよ」

「なにそれ？」

「『七転八起』の健さんは可哀そうだった」

「ああ、あの店の」

「そう、たった五年しか商売ができなかったのは酷すぎるって、自分のことのように悔しがるのよ」

「その話、俺も聞いたよ。おやじ、あそこの常連だったからなあ」

「居心地よかったみたいね」

「俺も何回か行ったけど、おかみさんの感じがよかったよ」

「お父さんもそう言ってたわ」

「地下道の通行が減っても、あそこはまあまあ流行っていたから」

「この『七転八起』の話、一回だけじゃないのよ」

「と、言うത്？」

「閉鎖の話が出てから、何度も聞かされているわ」

そんなはずはないと恭平は思った。今朝、嫁がマグボトルを運んできてくれたときに、その話をした記憶はある。

しかし、それが最初。何回も話しているなんて嘘だ。いや、ひよっとしたら一回くらいはしたかもしれないが、あったとしてもそんな程度だ。

「これだけじゃないわ」

時刻は既に十二時に近いから人の姿もない。ひよっとしたら、これが夜の地下道商店街の見納めかもしれない。恭平は閉めようとして掴んだカーテンの端から手を放した。商店街の盛衰を象徴し続けたモニュメントが姿を消すのだ。

視線の端に人影が映ったのはそのときだった。腰をかがめ右脇に何かを抱えている。暗い上に、街灯も後姿を照らして顔は見えない。人影は地下道商店街への階段の前まで行くと、そこで佇んだ。街灯の作るシルエットが歩道にぼやけた輪郭を描き出している。しばらくすると人影はあたりを見回した。

その瞬間、恭平は「あッ」と声を上げた。街灯に照らし



第7回健友館文学賞大賞受賞!

「彼らは何を語りたかったのか」

タイ・カンボジア国境の難民村。
作られた避難所で暮らげになった数多くの死体が散らばっていた。

健友館

カンボジア難民の悲劇を描く

1836円(税込/送料共)

御注文はアジア文化社まで

出された顔が健さんに見えたからだ。細かな表情までは見極められなかったが、えらの張った顔の輪郭と垂れた目、胡坐をかいた大きな鼻が、それほど明るくはない街灯のことでさえ、健さんであることを主張していた。恭平はガラス窓に顔を押し付けるようにしてその姿を見つめた。

やがて人影は、何かを決心したように肩を大きく揺すると、地下商店街に残された小さな入り口に身を滑り込ませて消えた。なぜ健さんがここに、そして何のために地下商店街へと入っていったのか。しかもこんな夜中に。恭平は小さな入り口に目を注ぎながら、むず痒さが這う額を何度も拭いた。

昨夜の混乱を引きずったままベッドに横たわる恭平の耳に、かすかな人の声が窓ガラスを通して聞こえた。恭平はカーテンを大きく引き窓を開けた。朝の陽と冴えた空気が一気に流れ込み、バジヤマ姿の身を引き締める。人の声は商店街の端に取り付けられたスピーカーから流れる音声で、市内に巡らされた同報無線から発せられる尋ね人だった。最近はこの種の放送がやたらと多い。そのほとんどは徘徊老人に関する情報提供のお願いだ。今回も同じ類だろうと思いを閉めようとした恭平の耳に、くぐもってはいしたが、健さんらしき名前が飛び込んだ。聞き間違いだろうと思つた。しかし、上背や人相、年齢は健さんを想像させた。

た。認知症の症状とでも思っているのか、きつとそうだろうと恭平は思つた。

「とにかく、もう一度中を調べるように、工事の人に頼んでくれ」

「わかったよ、父さん」

これ以上反論しても仕方がないと思つたのだろう、二人は小さく頷いて引き下がった。

地下商店街への降り口で、出勤し来たばかりの作業員と息子が話し合っている。二人が指差している小さな穴は、最後に残されたただ一つの出入口だ。輝く朝日の中で黒い影を描き出している。ここから健さんは入っていったまま出てきていないから、いまも「七転八起」ににいるに違いない。早く見つけてほしいものだ。

二人の話が終わわり、作業員が小さな穴へ身を滑り込ませた。健さんは無事に姿を現すだろうか。十分ほどして作業員が半身を覗かせた。手を横に振っている。健さんはいたのだろうか。しゃがんで作業員と話していた息子が立ち上がった。

「七転八起」にもどこにも健さんはいなかったと、調べてくれた作業員が言っていた。しつかり確認したそうだ。これで納得したろう、父さん」

健さんらしき人が昨夜遅く地下商店街へ入っていったことはこの目で確認している。その後も出てきた形跡はない。だから、いまだにあの中にいるはずだ。目的は何だろうか。もしかしたら地下商店街と運命を共にしようとしているのか。そうかもしれない。健さんはあの店に命を懸けていた。全財産をつぎ込み、借金までもして。いつか「これが最後のチャンスかも」と言つた健さん夫婦の言葉が頭をよぎつた。恭平はとつさに手振りの鈴を振つた。何回も。

恭平の話聞き終えた息子夫婦は、驚きではなく戸惑いの表情を浮かべながら顔を見合わせた。信じていないことは明白だった。

「俺は見たんだよ、入っていく健さんを」

両拳を握りしめながら恭平は語気を強めた。

「でも父さん、もしそうだとしても、その後で出てきたかもしれないじゃないか」

「そうよ、何かを取りにきただけなのかもしれないわ」

息子たち夫婦の言葉には、とりあえず父親の主張を受け入れながら、そのシナリオを崩していこうとする響きがあった。

「それは絶対ない。俺は夜通し見ていたんだから」

恭平の強い語調にたじろいだ二人は再び顔を見合わせ溜息をついた。父親の話に妄想だと決めつけているようだった。

部屋へ入ってきた息子が困惑と憐れみの表情を浮かべて言つた。やはり父親がボケてきたと思つているようだ。でも、健さんの昨夜の姿が恭平の目に焼き付いて離れない。妄想であるはずがない。「だけど俺は」と言いかけて恭平は次の言葉を飲み込んだ。

間違っている、息子もあの作業員も。健さんはいまもあの中にいる。調べ方がずさんじゃないのか。いと信じて探すと、いるはずがないと思つて探すのではおのずと結果が違ってくるはずだ。悔しい。でも、これ以上言い張るのはやめよう。多勢に無勢。どんなに頑張っても水と油だ。溶け合う可能性はない。恭平は唇を噛みしめた。

妻がいれば、味方になってくれただろう。四十年以上も苦楽を共にしたのだから。彼女の姿が目の前に浮かんだ。微笑んでいる。

「もつと肩の力を抜いて。あなたがそうだと思えば、それでいいじゃないの」

たぶん、こう言おうとしているんだろう。胸のつかえが少しとれたような気がした。恭平は仏壇の中の妻の位牌を手にし、掌で包み込んだ。

早いものだ。もうすぐ二年になる。そうだ、肝心なことを忘れていた。そろそろ息子夫婦に言わなければ。三回忌の準備をするようにと。

恭平は額の辺りを盛んに掻きながら頷いた。

あなたも 文藝家協会に入りませんか！

公益社団法人日本文藝家協会は創立90年を超える文学者団体です。著作権の保護、法律や税務に関する相談、健康保険、文学者の墓、『文藝年鑑』の編集などの活動を続けています。『文藝年鑑』に名前も記載されます。年に一度の総会で、作家の懇親会も催されます。

入会資格は「文芸的著述を主な活動としている」文学者です。プロの作家だけでなく同人誌で活躍されている方にも資格があります。理事などの推薦が必要ですが、活動を証明する同人誌のバックナンバーなどがあれば事務局で紹介します。

会費などの詳細については事務局にお問い合わせください。

公益社団法人 日本文藝家協会

〒102-8559

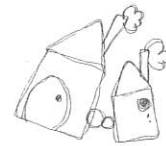
東京都千代田区紀尾井町 文藝春秋ビル新館5F

☎ 03-3265-9657 bungei@bungeika.or.jp

http://www.bungeika.or.jp/

銀華文学賞 受賞の言葉 土田ひろし

選んでいただきありがとうございます。年齢を考えると、ひとしきり嬉しい思いがあります。六十五歳以上の、総人口に占める割合が三パーセントに迫ろうとしているいま、高齢者文学に発表の場を与えて下さっている本文学賞の存在に深く感謝しつつ、今後も、高齢者の生き様や死生観を、同年代の視点から描いていこうと思っております。



土田ひろし

本名 熊崎 洋

1938 年生まれ

静岡県在住

1961 岐阜大学工学部卒業

同年東芝機械(株)入社

2003 同社退社

2009 銀華文学賞佳作

2015 伊豆文学賞優秀賞



イラスト／兒玉直和

小説の書き方を体験を踏まえて丁寧に解説する小説指導書

小説の書き方

作家を志す人のために

小説作法 改訂増刷版

五十嵐 勉

送料共 1000 円 (税込)

御注文はアジア文化社まで

クチボソ暮色

井上一志

夫婦で冬物の寝具を買い足すために商店街へ繰り出したが、これとは思ったものは懐具合に合わなくて諦めた。そのまま帰路につくのが惜しくて街外れまで足を伸ばす。東京郊外の住宅地域にあってもI公園の池は静かだった。話の途切れた後で妻が帰らなくちゃいけないわと口にする。彼女の実家のあった秋田県のY市へ戻りたいというのだ。常々繰り返すので私の耳管に湿っぽい疣が生じてきていた。

「帰ってどうするのだ。家は家主に返してしまったじゃないか」

「お墓があるのよ。あれは処分できない」

そこには彼女の父親と母親が眠っている。

「あなたが来てくれるのは、何年あとまでかしらね」

「おれのほうが先に逝くかもしれないぞ。だがね、お義父さんの墓に入れてもらうのは御免だから」

亡くなった義父の納骨で、Y市郊外の墓苑を訪れたのは五年前の遅い春だった。高台にあって西に雄物川の河川敷が望める気持ちの良い立地だ。周辺の木々の葉が勢いづいていて、畏まっている私たちは風景になじまない気がした。日差しを照り返す川面を遠くに眺めていると、瀬音が耳に届きそうでも不思議だった。いいところだなと妻に囁くと、頷いた。

昨年のは二月には義母のお骨を墓に納めた。墓地へ登る坂道に難渋する。親戚の連中は雪道に慣れているので私は遅れて列の最後尾になった。遅れついでによそ見をすると、堤防や河川敷に残る雪の反射を受けて雄物川が延び延びと銀色に輝いていた。先頭にいた妻がときおり振り返って私を見た。

子のない私たちだから、墓はいずれ忘れられてしまう。光をまぶして流れる雄物川の景色を思い浮かべて、目の前の暗緑色の水面を見つめていると変な心持になった。東京には川がない。護岸の施された水路はいくつもあるが、川というには風情が乏しい。この池にわずかながら湧いている水が零れてゆく先には暗渠がある。

行こうかと促すと、妻はもう少しと言って動こうとしな

不機嫌というわけではないのに眉をしかめるのが癖だった義父。いつも手を動かしていないと落ち着かないと笑っていた義母。

「お参りに行けばいいじゃないか。年に何度もとはいかないが」

妻はそうねと呟き、池の面に視線を落とした。

私たちは他の端のベンチにいた。妻は膝にひろげたバックから遅い昼食代わりのいなりずしを取り上げて口に入れる。手のひらに残った半分を見つめて言った。

「わたしがお墓に入ったら誰がお参りしてくれるかしら」

私は食べ終えたプラスチックの容器を潰した。それが乾いた音を立て手の中で抗った。彼女が声を詰まらせる。

かった。先を急ぐ用は何もない。私が市役所に三十年勤めて定年を迎えたとき、退職後は趣味を持つたらどうですかと、年下の上司にからかわれたが、慰みに明け暮れる日々を想像できない。ではどこか働き口を探しますかと絡まれて、もういいだろう、と、とりなす自分の声が聞こえた。

今年、妻が体調を崩して仕事を辞めると、家の中が息苦しくなった。夫婦にとつて二間と台所があれば狭くはないが、昼の時間は長すぎる。はじき出されて行き場がなく、ただひたすら街中を歩いた。そのうちに歩く道筋が整理されてきて、I公園内の散歩が習慣になった。

季節ごとの雑木林の変化、空の広がり、風の肌触り。他にすることがない無聊を慰められる。だが池は水底を暗く見せてよそよそしかった。

妻は二人分の空の容器を押し込んだ手提げを膝に載せて肩を丸めていた。髪ほつれ毛を指に絡めてなでつけるが逆らわれる。化粧つきの頬は青白くさえ見えた。

池の対岸から突出した小島があつて、神域である。紅柄色の社殿が木々に囲まれてほの暗い。弁財天が祀られてある。妙な噂があり、面白おかしく伝えられていた。男女で参拝すると咎められ、のちに仲を裂かれるらしい。

男女の仲が定まらないのは世の常のこと、嫉妬などこの言いがかりには弁財天も苦り切っているのではないか。私は浮かない顔の妻を眺め、連れだって参拝してみようかと

性悪なことを考えたが、もとより信じてはいないのだ。ふざければかえって崇^たられる。

五、六歩離れたところのベンチに子を連れた若い母親がいた。傍らのベビーカーにスキの穂が投げかけられてあり、桃色のゆったりしたセーターを着込んだ幼児が座席に沈んでいる。水の面を指さして何事かを母親に訴えている。母親はいちいちうなずくが顔を向けるでもなく、言葉を返もしなかった。

妻は魅入られていた。けれどもほほえましく眺めていたわけではない。表情にこわばりがある。子にも孫にも恵まれない不遇を忘れようとするのだろうか。

私は目を逸らした。未練に引きずられたくはない。寂しさは時が経つうちに胸から落ちていずかかに運び去られるはずだ。

突然、噴水が吹き上がった。小島からやや離れた位置に水しぶきの輪が広がった。静けさを乱して金属音が跳ねる。隣へ目を向けると幼児が身を固くしていた。

泡立つ水が波に変わった。水音は耳慣れにつれて遠ざかり、代わりに波のうねりが押し寄せてくる。近くの棒杭に押し返された波が勢いを失う。岸からせり出した老木の影がそのあたりを藍色に染めていた。

灰白色の雲が広がって日差しを隠すと、木々の葉の黄色みが濃く映える。私は胸に溜まってきたものを吐き出した。

そかに嫌な笑い方をした。殴りつけようとしたが、彼女の傷の深さが笑みの中に潜んではいけないかと気障な理由をつけて自分を制した。その後、彼女は怒りをぶつける相手にもならない私を見限ったのか口を閉ざした。

池の端に立った妻が足元の水を覗き込んでいる。草に隠されて水面と池岸の境はあいまいだ。ずるずると靴がすりだしそうな位置にいる。水が池底の泥を映して粘土色に揺らめいていた。底の形状が透かして分かる。朽ちた葉が沈んでいた。土管の欠片らしいものが転がっている。彼女が声を漏らした。

「ねえ、魚がいるわ。小さい魚」

「鯉なら見かけるけど、小魚は知らないね」

「群れているわよ。メダカじゃない、もつとおおきい」

私はそうかと答えたり覗き込むのは止した。実は彼女にある川魚を見せようと思いついていたのだが、間合いがよすぎて気が引けた。

彼女は横を向いて親子に声をかける。

「お魚がいるのよ。たくさん泳いでいる。可愛らしいの」不意に呼びかけられて、母親は何ごとかといった不審な顔をしたが笑みを返してきた。でも池の端に歩み寄ろうとはしない。幼児は妻の声に反応したが、言葉を理解できるはずもなくただ口を開けていた。私は赤子から幼児へと脱皮しかけの頼りない愛らしさに釣られて、ふと冗談を思い

「今の時代にはしあわせを保証するものなどない。子どもや孫がいたら心配が尽きないじゃないか」

唐突な八つ当たりには妻は冷たく答えた。「時代のことなら一介の親の手に負えないわよ。親でもないあなたとわたしにはそれぞれの責任があるだけ」

「責任を言われたら、おれは降参だ」

何に降参するのか考えてもいなかった。

「目を瞑って頭を下げるだけだ」

「誰に頭を下げるつもり。あなたはおかしい」

もう三十年近く前だが、私たち夫婦は倦怠感に纏われていた。壮年期を迎えたばかりなのに、活気を失い始めた心身に不安を感じていた。平坦な日常をありがたくもないと思ひ、不満のはけ口を探して言い争いは度々あった。

妻は出産年齢が遠のくのを怖れて、覇氣のない夫をなじめるのだった。私に問題があると睨んで医師のもとへ行くように要求する。不妊治療の外来を訪れて、夫の同伴がないことに苦言をもらっていた。

私は背を向けた。内心笑った。自分のことを知らないわけではない。成人前に罹った流行りの耳下腺炎をこじらせて、治療後に医師から子をもうける確率が低いとほめかされてきた。それを隠して妻に同衾を強いたのだから、無意味とうそぶき、無関心のふりをするしかなかった。

妻は、子を得られないと悟ったそのときだったろう、ひついた。脱ぎ捨てられた皮は親が大切にしまっておいたりするのだろうか。

「こんな池にも魚がいるのよ。不思議だわねえ」

妻がふたたび誘いかけるが、親子は動く素振りも見せなかった。彼らにとつて魚が興味の対象にならないことは明白だ。かえって母親の背筋を伸ばした姿勢に圧倒される。

妻は疎んじられて立ちすくみ、寒くなつたわと眩いて空を見上げた。赤茶けたヌマスギが雑木を従えて曇り空へ伸びあがっている。杉でありながら落葉する変わり種だ。

私は頃合いとみて口を開いた。

「すぐそこに水生動物館がある。おれは時々覗いて見たりするんだ。川魚がいるよ」

彼女はいぶかしげに見返して首を振った。

「後ろを振り向いてごらん」

私たちが占めていたベンチと背中合わせに道路を挟んで管理棟があり、鉄格子の門が開かれている。水生動物を見学できる施設だ。有無を言わず歩き出す。妻は、仕方がないわねと立ちあがった。

水生動物館は倉庫と変わらない地味な建物だ。平屋の灰色の壁には窓がない。館の敷地は池水を引いた掘割に囲まれていて、短い木橋を介して圃地とつながっている。館内の照明が抑えられているので、水生物を展示する水槽は浮か

び上がって見えた。それらは通路の片側に配置されており、ひとつ観ては次のひとつへと入館者は導かれてゆく。

妻は、戸外の池に泳ぐ小魚に興味をひかれていたのに、明るい舞台に配された展示物には素っ気なかった。ひとつおり見学して私の面子を立てれば用はずむと、逃げるみたいな速足になる。

見せたい水槽までは黙って追ってゆく。それは順路を折り返して反対側に出た先にある。生息環境によってまとめられた魚類は、河川の上流から下流へという具合に現れた。溪流魚のイワナやヤマメが、流水に逆らって橙色の斑紋の散った横腹をひるがえす。飄悍な動きに目を奪われたのか妻が立ち止まった。覗き込む彼女の顔が水槽の上部から射しこむ灯に照らされて白々とガラスに映る。面白がつて見ていると、私の視線を捉えて不機嫌を露わにして見返してきた。

「何を観ているの。あなたの顔には飽き飽きしているわ」

「露出を控える努力はさせてもらっている」

他の見学者はいなかった。声高に言い合うのを遠慮しなくてもいい。平日の午後に、水生物を観ようという酔狂な人は少ない。

「あなたが家に遅く帰ってくるときは、女の匂いを残していたわね、わざとかしら。無用心を演技するのは何のためなの。叱られたらその分罪が目減りするとでも」

かった。

「おまえがこどもを欲しがるので、いっそのこと、おれがこどもを演じて甘えてやろうとしていただけだよ」

「滑稽すぎるわよ。お粗末だわ」

言い放つて次の水槽に移って行った。川の中流域に生息する魚たちが群れをなしている。透明度を欠くがたつぷりとした水を楽しむように十数匹の群れが大きく旋回している。ウグイと名札にあった。青黒い肌のたくましい体型で、何匹かは繁殖期が近づいた兆候の赤橙色の腹を見せていた。彼女は一瞥しただけで突き当りまで進み、左に折れた。そこには横幅のある水槽が広がっている。岩の間に砂地と水たまりを造った殺伐とした風景。前景にせり出した小岩の一つはしゃくれた瓦に覆われていた。醜怪なカミツキガメの甲羅だ。

水槽に向かって動かない妻。私は後ろの壁に穿たれた丸窓に近づいた。厚ぼったいガラスを透して鈍い光が零れる。池の一部が覗けた。雨でも降りそうな暗さの中、早々と葉を落とした対岸の雑木林にはわずかながら明るみがあった。野鳥の鳴き交わす声が、外から遮断されたはずの館内に響いた。

「わたしだっこどもを生めたのよ」

私は反射的に周囲を見回した。誰もいない。声に出された一行で、長い間不面目を抱えこんできた私の意地が崩さ

禁を解いて懐から刃物を取り出してきた。突き立てられて困惑した。ガラスから目を剥がして隣に立つ彼女の横顔を直に見た。薄っぺらで実体がないみたいだった。

「今頃になって疑われるなんて迷惑だ」

白を切るしかない。厚顔で無恥な態度に徹しければ真実を押しつけられるが、そんな手順を踏まなくても対抗する材料はあった。私は妻がひそかに墮胎していたのを知っている。自分の不行跡が妻の不貞を招いたのかなどと因果を検める気はなかった。復讐などを企てる粗野な女ではない。起るべきことはいろいろだと公平な気持ちを保っていた。慎重さを欠いた男を選んでしまった彼女の不運に同情した。情事の相手がつまらない奴と思えば、夫たる自分が貶められるようで腹が立つのだが、修羅場にしたくないので逃げていた。

「おれは嘘が下手だったと言いたいのか」

「いえ、玄関の薄闇で寒そうにしているあなたが可哀そうだっただけよ。嘘をついたかどうかなんて聞いていない。分かりきっているのにわざわざ見せつけるのがこどもじみていた」

子のいない私たちを寂しそうなどと他人の口で慰められたが、領いてみせるにはまだ寂しさが足りなかった。私は女友達を作り、束の間で見返りのない解放を味わった。何から解放されたかったのか、少なくとも妻の束縛などはなかった。その場を逃げて反対側の通路に入ると、水槽の水量が増えてきたのが目に入る。水草が繁茂して薄緑に濁った水が膨れ上がっていた。

妻に見せたかった小魚は下流に近い湖沼に棲む。彼女がついてくるのを確かめてから足を急がせる。黄色や赤のプラスチック札が貼られた水槽群のところまで来て、不規則に打つ鼓動を肋骨の内側に感じた。

黄色い札は近い将来に絶滅が予想されるもの。赤い札はすでに絶滅の危機に瀕しているもの。見学者に保護や保存の責任を問うているわけではあるまい。かといって彼らを黙殺するほどの度胸はない。妻が発した子どもを生めるという一言に頭を揺さぶられていた。

それは絶滅危惧とされた赤い札の水槽。団扇に似た大きな葉の水草が何本も立っている。細長い莖のすきまに手の指ほどの大きさの魚がいる。そのはずだったがいまは見えない。わずか半月ばかりで絶えてしまったのかと、一瞬笑いがいそうになってぞっとした。それなら展示は終了するにちがいないと思い直して目を凝らす。

水槽の片隅に泡が立ちのぼる。酸素を供給する機械が働

いているのだ。館内の空調設備の低騒音も響いている。決して静かなわけではなかった。泡は次々と生み出され列をなして上昇し、人工灯に照らされた水面に達すると消えてゆく。水草の林立する奥に薄闇があり、光の届かない先行きを暗示していた。

初めて水生博物館を訪れたとき、私はここにたつた二尾だけの魚を見ていた。はじめは兄弟かと思ひ、そのうちに親子でもいと譲り、しまいに夫婦の慎ましさに到達してつい目を逸らしたりした。

夫婦でありながら寂しさに蚕食されているような小魚。

この生き物との遭遇はたまたまだが、妻に引き合せようとするいたずら心のもと、彼女に対する拭いきれない引け目だったか。励ましたいなどと上滑りな善意をてらったわけではないが。

「何もいない水槽というのも可笑しいだろ。先月は確かにいたんだがね」

彼女はこちらを見てから、もっともらしくガラスに隔てられた世界に目を注ぐ。

「いるじゃないの。しっかりとごらんさいよ」

怒られて、目を据えると確かにいた。水草の細い茎に絡まる木片と見まがう魚がいた。

「見せたいものはこれなの。何が変わっているの」

そのとおりだ、見る限り変わったところなど何もない。

ツグがモツゴという種に属していることをこの歳になって知った。

「シナイモツゴはクチボソの一族で宮城県品の品井沼に逼塞している。それが本家筋だ。だが、もう絶えてしまう。情けないことに彼らは普通のモツゴに侵入されて、種族ごと乗っ取られてしまうそうさ。軟弱な気質なのか、性格が善良なのか」

東北地方と東京地方を引き比べて切ない気持ちになった。モツゴが東京地方ではありふれたクチボソなのに、北国ではシナイモツゴと呼ばれ、同族に血筋を奪われて消滅する必定は痛ましい。

妻が怒りを含んだ声で言い立てる。

「目の前の二尾が死んだら種族が絶えるなんて理解できないわ。生きているものが死ぬのは当たり前でしょう。なにかも失われるのとは意味がちがうわよ」

眉間に人差し指を当てて溢れてきそうなものを押し返す素振り。

「死ぬという怖さは分かるわ。でも一族の絶望を背負うなんて酷よ」

自らの命が直面した大事に比べれば種族の未来などどうでもいい。私は小賢しいことを言いそうになり、益体もない思いつきを口にした。

「人間に例えてみるかい。二尾が夫婦だったらおれたちと

貧弱な細身で淡い墨色にいろどられた二尾がじつとしてい

る。私は言い添えた。

「絶滅の危機にさらされているのだ」

「死にそうだとどうして分かるの。勘が働いたなんて言わないでよ」

「説明書きには種族が途絶えてしまうと。一見すると普通の魚だが由来をたどればとても希少なのだ」

「種族なんて言ったら漠然としていて、溢れるほどいるような気がするわ。それが絶滅するってとんでもないことじゃないの」

沈黙のあと、水槽に正対して、相変わらず動かない魚体を睨んでいた。

「何という種族なの。死んだら名前がこの世から消えてしまうのね」

「シナイモツゴだ。モツゴの一種だね。ああ、クチボソと

いったら分かるかな」

「聞いたことがない。クチボソって何、とりわけ口が細いようには見えないわ」

「受け口が特徴だからだ。おれは子供の頃から馴染んでいたよ。町外れの川で釣った。実は珍しくもない雑魚だ」

春先のまだ寒い季節だった。竹の釣竿とバケツをもって多摩川に注ぐ野川の川べりを歩き廻った。ズック靴が濡れて足指が凍えて痛かった。半世紀も昔のこと。そのクチボ

似た立場かもしれない」

彼女は頷かなかった。が、唾を呑みこむ喉の動きで心の揺れが見えた。

「怖いのかい」

このセリフは言ってはならないと戒めていたのに走りすぎた。

「わたしは自分からは言わないわよ。できるなら察してちょうだい」

夫を食わせ者とらんで混ぜ返す。

「でも、怖がつてもいない、困つてもいない。わたしに残されたものはないから。母親は逝ってしまったし、あなたは元氣だから介護の心配をしなくていいし」

話は逆さまだ。私が介護をする事態を心配していた。介護になるのか看護の急を要するようになるのか、妻が仕事から離れたときから彼女に降りかかってくる厄介を予感していた。

「おまえが危難に遭遇した一尾だとするなら、おれは片方の元氣すぎる頓馬だ」

「介護を頼んだりしないから」

「ああ、面倒をみるのは親父で懲りたからな」

私は憎まれ口を叩きながら、自分の父親ではなく妻の父と母に思いをはせていた。もう十年ほど前のことだが、彼女から寝たきりの父親を介護する母親のもとに帰らせて

くれと訴えられた。短期の見舞いではない。いつ終わるともれない仕事だ。老々介護と世間で取りざたされているあの事態を、保育士の職を捨てて肩代わりする気でいた。

彼女は、一人娘が二十歳そこそこで家を飛び出した後ろめたさと、親への愛慕を繕り合わせて、更年期で変調をきたした心身をさらに追いつめようとしていた。同じ頃、私の父がおかしくなり、手に負えなくなっていた。彼女に去られたらと思うと腹が定まらず私は薄情に徹した。

連れ合いに先立たれてしまった後、父は一人暮らしを守っていたが、脳梗塞で倒れた後、下の始末ができなくなっていた。放っておけなくなり、私たち夫婦が面倒をみると持ちかけたとき、父が別室で吐いた言葉が今も胸を殺している。あの女に俺の世話をさせるな。おまえの女房だ、俺のじゃない。彼は粘っこい目で笑い、いやだなと眩く。珍しく正直なことを言った。

狷介な父の扱いにくさを言い訳にして施設に預けることを先ず考えた。居住する市の担当者に関合させたら、特別養護老人ホームは三年待ちだと突き放され、私一人が父のもとに棲みこんで世話を始めた。別居になったはずの妻が入りびたりで家事一切を担ってくれなければできないことだった。

二人とも勤めながらの半年で疲れきり音^かを上げた。逃避の先にあつたのは有料老人ホームだった。だが支度金が私
夫を看取った後ひっそりと亡くなった妻の母に言うべき言葉が私には見当たらない。河川敷の雪原を裂いて流れる銀色の雄物川を忘れられないだろうと思うだけで。

魚は動かない。お互いを意識するように寄り添っていた。水草が繁茂した水槽はねっとりとした草の色に染まるものだが、ここに生えている幅広のまるい葉は水色を汚さない。灯を透過させた蛍光色の水に溶かされて、魚の輪郭が怪しくなる。細筆で刷いた鱗が消えて魚影が紙片に似てきていた。一枚はやや大きく、他の一枚は小さめで縦に筋が通ってさらに細く見える。紙片に変わり果てたら、命を繋ぐという呪縛を解かれてはらりと落ちるのか。

おまえたちは本当にあのクチボソの同族なのか。あのときあんなにたくさん釣れたではないか。バケツの中で押し合いへし合いにぎやかだった。クチボソがモツゴであるのは否めない事実。ではモツゴに侵略されて種族ごと滅びるシナイモツゴっていったい何ものか。

妻は俯いて目を瞑っている。ゆらりとリノリウムの床に腰を落として横座りになり、私が支えなかったら転げてしまふそうだった。傍らに胡坐をかいて座り込み、夫婦で何をしているのかと自嘲の息をついたとき、耳を敲かれた。

彼女が顔をあげた。

「泣いているわね」

の蓄えでは用意できない。妻名義の預金を当てにした。彼女は何も言わずに通帳を差し出した。無認可保育所を渡り歩いて勤めながら、すこしずつ貯めたものがやつとまとまったところでの取り崩しだ。

老人ホームで入所説明を聞いている間、父は笑みをこぼしつつ車椅子を揺らし続けていた。車椅子のハンドルを保持していた妻の腕も一緒に震えている。父を居室のベッドに残しての帰り際、彼女がどんな思っているのかと顔を覗き込むと手で払いのけられた。

父は在宅時のホームヘルパーには嫌がらせをしたのに、施設の職員には愛想を見せて親切を取り込む。その狡さには安堵よりも余憤を抑えきれなかった。面会の都度、私は毒のある問いかけをぶつける。彼はのほほんと答えた。恥じ所を見られるなら、知らない他人のほうがなんぼか気が楽だ、恥でもなんでもないさ。ほう、すると息子のおれには恥ずかしかったのか、息子の女房に対してなら恥じ入るのか、当てこするとそっぽを向いた。父は入所して三年経たないうちに逝ってしまった。

妻は舅の腹の内を知らずに、十日と空けずにホームに顔を見に行っていたが、彼のわがままとお気楽に接するたびに、自分の母親を顧みて苦々しかっただろう。ホームに預かってもらい、私たちの手が抜けたのだから実家に帰してほしいと言いたいものだったが、なぜか黙っていた。

「こどもだな。館内にはいなかったが」

「あの子かも知れないわよ。ほら池の端にいた母子連れ」

「あの母親が水生物に興味を示すとは思えない。池を覗きもしなかったじゃないか」

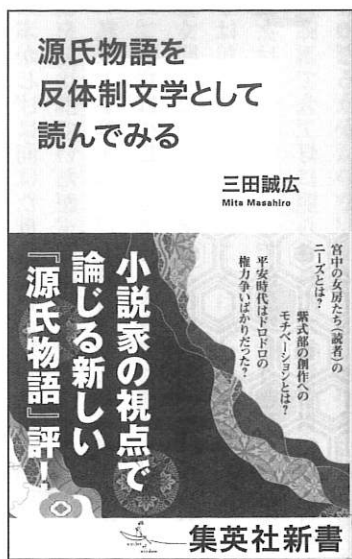
それには同意しかねると彼女は首を振り、耳をそばだてる格好で、曲がってきた角を見る。泣き声はさらに大きくなり、哀しい色合いが加わってきた。

「何かが起きているのかもしれない」

妻を残して立ちあがった。ちよつとふらついた。

近づくにしたがつて声はうねりを強めてきた。角を曲がるとペビーカーが通路に放置されてあった。あの幼児が両腕を前方に差し出し叫んでいる。意味にならない言葉を横広の水槽に投げつけていた。

大岩小岩を散らしただけの荒涼とした世界。無生物を



装っていたはずの岩が喉首を突き出して亀の姿に変身し、ガラスの結界を犯して追ってくる。幼児はこの異形の物に向って喉を開き、幼いなりのメッセージを届けようとしている。その真意は大人の頭で解き明かせるものではなかった。

水枯れの水槽に光明が集まって妙だった。私の背中側から光が注がれている。振り返ると壁の丸窓に陽光があった。北向きの窓なので腑に落ちなくて覗いて見た。池を隔てた対岸の建物のガラス戸から反射光が飛び込んできていた。傾いて平らに近い陽光が絶妙な角度で届けられている。

幼児を抱き上げた。すると泣き止んだ。私の首に腕を回して力を籠めてくる。獣じみた脂っこい匂いが鼻を突く。すぐに草を刈った後の甘い香りに変わる。懐かしさを誘い出されて狼狽えた。こんな匂いを知らないはずなのに。

私を見上げる顔からこの子の心を読み取ることはできなかった。思いを他人に伝える術を知らないのだろう。見つめるだけの無垢に貫かれて、他人の子どもという朦朧としたものが、身中の虫であつても構わないと思えるほど愛しくなってきた。

廊下側から母親が現れた。場違いな明るさに面食らつて、手で顔を覆う。その手には細い棒が握られあり、先端にカメラが取り付けてあつた。無意味に振りまわされ、あたりをなぎ倒す勢いだった。

だろう。思いつきが常識を超えている自覚はある。それでも、母親が、はいお願いしますとほほ笑んだって悪くはないと考えていた。

彼女は詰め寄りたくても、足を動かさない。

「おかしなことを言わないでください」

吐き出したが、あちらこちらを見回すだけで次の言葉が出てこない。やつと視線を定めて訴えた。

「人を呼びますよ」

他人を交えたいとするのは、この事態から脱出したい気持ちの表れだ。あるいはもつと簡単な理由かもしれない。つまり、何が起きているのか答えを出してもらいたがつている。この女性が母親としての決断を下すには未熟なようだ。だから助言が必要だ。

「それはいい。誰かに来てもらおう」

えっと彼女は息をのんだ。目をしばたかかせてからどうしてなのと見開く。

「立ち会つてもらいましょ。利害のない人が裁定してくれるなら後々の面倒を避けられるではありませんか」

彼女は身をすくませ、全身から色が失われて蒼白な彫像のように小さくなった。

「この館の責任ある人がふさわしい。呼びましょ」

私は自分の発想に納得して、さて自ら足を運ぶのか、それとも彼女を走らせるのがいいかと頭をひねり、幼児を抱

いぶかしげに向けた母親の目が険しさに変わって、幼児と私を見比べていたが、状況の整理をつけたのか頭を下げた。私は、手渡すべきだったかもしれないが一步後ろへ退いた。彼女はベビーカーを引き寄せて空いている手で座面を軽く叩いた。ここへ乗せろという意図は分かった。でもそうはしなかった。

彼女は自撮りのカメラで何を写そうとしていたのか。薄暗い廊下で人工灯に照らされた水槽を背景に何に見惚れていたのだろうか。いや、泣いているわが子よりも強く心を騒がすものを見据えていたのだ。

「この子をしばらく預かりましょか」

思いもしなかったのに、戯れ言が飛び出した。

「むずかるお子さんがいては心ゆくまで観察できないでしょう。何をかは存じませんが」

慇懃を分かってくれると思った。無礼にはならないだろう。

彼女は顔色を変えた。見知らぬ他人から出た突発の意味をどう取つたらいいのか余裕をなくしている。私は図に乗ってたたみかけた。

「三十分や一時間という半端な時間じゃいけません。責任をもって預かるなら物心がつくまで、いやこの子が自立するまでなら何年でも」

ありがたいがられるとは思っていないが、損な話ではない

えた私が動くのは適切ではないと独り合点し、顎をしゃくって見せた。

彼女は走りだせなかった。その代わりに悲鳴を上げてその場に座り込んでしまった。これでは埒があかないので、自分が行くしかないとき歩き出したとき、背中を叩かれた。管理者がもう到着したのかと振り向くと、妻が両腕で私を組み止めようとしてくる。

「もう止めなさい」

何を止めるのかと聞き返した。自分たちの責任はと告げかけて、そんなものはあつたのかと言いよんだ。覆いかぶさってきた理性の網をかくぐって口走った。

「この子を預かるのは滑稽か」

「あなたは自分が何をしようとしているのか分かっていない」

分かるとか分からないとかの問題ではない気がしたが、彼女が絡ませてきた腕の力強さは尋常でなかった。奪い取られまいと抵抗するなら、幼児を壊しかねないほど。もとより、彼女が預かるならことは終わる。

彼女は抱き取った授かりものを改めて確かめる。覗き込まれて幼児はにこりとした。さらに額を押し付けられるとのけぞって喜ぶ。しばし至福に似かよった時が流れた。

妻は胸に兆した誘惑を断ち切って幼児を母親に返す。母親は床にへたり込んだまま上半身だけを伸ばして、授けら

れる賜物を仰ぎ見る。母親の懐に納まると同時に子は泣き出した。小さな生き物の叫びが殷殷と館内に響き渡った。

私の前に立はだかった妻は両頬の皺を鼻柱に集めて笑った。そして私の頬を手のひらで撃った。力の限りを尽くしたのだろう、肩で息をつく。それで終わりではなく握り拳が反対の頬を襲ってきた。最初の折檻は心に納まった。だが間をおいてからの叱責に対しては用意ができていなかった。身体の反応が遅れた分よろけた。彼女が付け加えた二つ目の打撃に籠められたものは何だったろうか。何でもいい、私はそれを引き受けたことほっとしていた。

「女の子だったわね」妻が呟いた。

母娘は入り口に引き返して行行った。ベビーカーの車輪に不具合が生じているのか、気障りな音を立てる。自撮り棒を掲げている影が壁に張りついたまま滑ってゆく。幼児の泣き声は収まらない。遠吠えに似ていた。呼ばれているなと感じたのは、気脈で通じたものが残されていたからだろうか。老化して固くなった耳管にも親しい微風が吹いてくるようでこの甘味を堪能した。

私たちがこの場所にいる用向きはなかった。順路に従って、つまり母娘とは反対側に進んだ。シナイモツゴの水槽の前にさしかかったが、妻は立ち止らずにちよっと目を走らせただけだった。私は確かめられずにはいられなかった。

ようだ。

秋田へ帰ると口が滑ったのは、雄物川に溢れた陽光を再び眺める悦びに惑わされたからか。

「墓が心配の種なのだろう。おまえは自分の始末だって考えなきやいけないし」

思いやりもない露骨な言い方を躲^かけて彼女は声を弾ませた。

「嬉しいわ。あなたがお墓を守ってくれるとは思っていません。心変わりには歓迎よ」

「いや、守るのはおまえのほうかもしれないぞ」
「あなた、病院に呼ばれたら逃げないでください。子どもがどうのという歳ではないのだから。もうわたしたち自身の覚悟が問われているのよ」

私はああ分かつていよと頷いて、水生博物館の扉を押し開いた。

空はどんよりと曇っていて、夕刻間近の闇が広がっている。ヒマラヤ杉が管理棟の屋根を越えて高々とそびえ、夜の帷をおろす備えをしている。館内通路の突き当りの丸窓から差しこんできた明るすぎる陽光はどこへ消えてしまったのか。いまは薄墨色にししか見えない水生博物館の建物と、園内敷地を隔てる掘割の黒っぽい水に病葉がいくつも浮かんでいた。

公園の周回路の松並木の下を出口に向かった。人目のな

彼らは時間に見離されて全く同じ位置に同じ姿勢で、紙細工にしつらえられた格好で偽造の林の陰に停滞していた。

彼女がふと立ち止まり、振り向かずと言った。

「あの子たちは死ねないのかしらね。ずっとこの世に止まり続けるのだわ」

そんな不思議があるかもしれない。絶滅という意味はもう生きてはいないのだと解釈するならばありえる。水槽に閉じ込められた二尾に目を注いだ。

彼らのはあの子と呼ばれた小ささの限りで、与えられた生命を保持している。躍動したりはしないが、空間を何者かとして占めている。生き続ける使命を帯びているかどうかにかかわらず、その権威は誰にも侵すことはできない気がした。

私は妻の背を押して出口へ急がせた。

「帰ろう」

「どこへ帰るの」

彼女の問い返しに他意はない。何気なく吐いた私が自分の言葉に躓かされた。

「秋田へ帰るしかない」

告げるとまじまじと見つめてきた。記憶にない生真面目さを突きつけられて、間違いを犯したかと自分の言葉を反芻した。彼女の額に二筋の皺が刻まれているのを見つけた。目尻には蒼い影がきざして染みに変わる用意ができてい

いのに乗じて妻の肩に腕を回すと、嫌がらずに身体を寄せてきた。手ごたえは柔らかいのに、芯のほうに譲らない硬さがある。頼られてはいない感触を違和感とは取らなかつた。お互いに余地を残してのほどほどの関係を拒むいわれはない。

妻が唐突に言いだした。

「お墓参りで振り回されるのは変だわ。わたしたちはまだ生きていけるのだし」

即座には意味を聴きとれなかった。

「どうした。何を迷っているのだ」

「いいえ、死にたるものに、死にたるものを葬らせよ、という言葉があるわ」

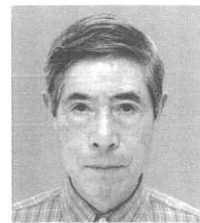
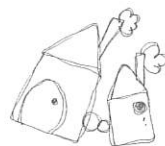
どこにそんな言葉があるのかと問い質すにはあまりに時間が足りないように感じた。それより何処へ行こうとしているのか、取り残されそうで急ぎ込んだ。

「はぐらかすのはよせ」

「帰らなくてもいいわ。このまま東京で暮らしましょう」
私は怒ることを忘れていた。感傷に酔っては生きてゆけない、当たり前に戻るのがと言っているだけなのだ。

「あの子たちより長生きできたら、わたし」

妻はこの後に続ける言葉を呑みこんで、私の腕を解いて歩き出した。



井上一志

いのうえ かずし
1945 旧満州国生まれ 東京都
八王子市在住
早稲田大学教育学部卒業
定年退職（地方公務員）の後に
思い立って小説を書き始める
「ヒヨドリ」（『江古田文学』
83号）「ヒイラギモクセイの
棘」（『江古田文学』92号）

銀華文学賞

受賞の言葉

井上一志

楽しみではじめたことが、楽しんではいられない心境になりつつあります。書くという作業を進めるにつれて、自分の弱さ、ずるさ、思いがりなど、隠してきたことが露見してきました。これはよいことなのでしょうが、直視するのは辛いものです。それでもこの度、思いがけなく賞を頂いたことで、覚悟を迫られました。自分の中の暗部と向き合ってゆきます。そのきっかけを与えてくださったことに感謝いたします。ありがとうございました。

繭の中

森崎房枝

第3回まほろば賞特別賞受賞

この小説の深い刻印は、低い位置からの生きる力を感じさせると同時に、命へ向けるいとおしみの神々しさをも放っている。それは病と運命と闘い続け、それを克服した者の光輝でもある。文学としての強い生命力を持ち、永く世に残る作品と信じる。

「文芸思潮」五十嵐勉

アジア文化社

1500 円税別送料共
御注文はアジア文化社まで

銀華文学賞 優秀賞

キム・ジョンウン先生、
革命の日は近いようです。

倉木基志

言うで」と次男は言った。

「あなたは、ちょっと黙っとりゃあ。こんなときに」とその妻がウンザリしたように言った。

それから三十分も昏々と眠っていた高美姫が、今度は目を開かないまま、もぞもぞと口を動かした。

「ムル……。ムル」

長男は彼女に顔を近づけ、「なんや、婆ちゃん、ムルって、なんや！」と大声で尋ねた。次男は一瞬の間を置いてから、アツと声を上げ、病室の外に駆け出していった。その彼がコップに注いだ水をもって、病室に再び戻ったとき、一斉に白い目が彼に向けられた。婆ちゃん、婆ちゃん、と長男が、もうこと切れている母、高美姫の頬を手で叩いている。次男は長男を押しつけ、固く閉ざされた母の顔に向

尾張一宮の古ぼけた病院の一室で、高美姫はその八十年の生涯を終えようとしていた。長男夫婦、次男夫婦、そして、その次男夫婦の娘がベッドを取り囲み、息をつめて、彼女を見つめていた。

「アレ……」と、そのとき高美姫が天井に向かって目を開き、皺くちゃの口を動かした。「アレや、アレ。……アレを。ワシに」

眩いたきり、彼女はまた目を閉じた。息はしている。

「アレって、なんや」と白髪の目立つ長男が、同じように白髪の目立つ次男に聞いた。

「今、聞かんと、永遠にわからんわな。死人に口なして

「ユタヤ難民を救う」すべてを賭けたその決断が多数のユタヤ難民の命を救った。太平洋戦争末期、キス力島の奇蹟の撤退も成し遂げた真の英雄の足取りを描く、未開星島の熱戦！

小内是壽
ユタヤ難民を救った男
樋口季一郎・伝

ナチスの弾圧にシベリ
きた2万人のユタヤ難
民を、命を賭けて救っ
た日本人将軍がいた。ハルビン特務機関長樋口季一郎少将。
激寒の中で死に瀕したユタヤ難民を人間として救済した英
傑の軌跡を辿る歴史評伝。

ア経由で満州に逃れて
民を、命を賭けて救っ
た

アジア文化社

1512 円税別送料共
御注文はアジア文化社まで

かつて、震える声で言った。

「持ってきたで。……ムルや。飲みたかったんやろう」

一九九四年の春の一日のことだった。

高美姫の死に立ち会った次男の娘、華奈はその場で滂沱の涙を流した。その場にいた誰よりも彼女のことをよく知らないはずの華奈がその場にいた誰よりも激しく泣いた。

ところが、数分もすると彼女ははたと何かに気づいたように顔を上げ、いまださめざめと泣いている父と母、叔父と叔母に、

「あ、ごめん」と言った。「私、帰るわ。もう遅いで」

彼女は一人でタクシーに乗って家に帰った。田舎町の市道の交差点近くの一軒家である。かつて高美姫が密造酒作りと怪しげな古売商をしながら、女手一つで長男と次男を育てあげた家であり、のちに長男が結婚をして出て行くと、そのあと結婚をした次男、金田鉄男がその家族とともに暮らしていた家である。もともとその金田鉄男の長女、華奈が生まれた頃には、「ワシは一人の方がええ」と言っていて、高美姫は別のところに引越していたが。

華奈が戻ったとき、そこには、東京の大学に通っているその弟がいた。

「ちようど今、着いて、これから行くこうと思つたところや。で、あんた、なんでひとり帰ってきたるんや」と

やぞ。それで覚えたんでしょう。韓国語」

「スパイじゃねえよ。親父は北朝鮮の帰国運動をやつたんだよ。自分も帰るつもりで」

「どこに！」

「北朝鮮に決まつとる。でも、自分が説得して北朝鮮に送った人たちからもらった秘密の手紙で、そこが地上の楽園どころじゃないってわかつて、行くのをやめたんだがや」

「……最悪」と華奈は言った。

「スパイの方がマシだわ。まあ、ええで、あんた、早くそこどきやあ。電話するで」

彼女は弟をリビングから二階の部屋に追い払い、明後日、結婚することになっている佐藤陽一に電話をかけた。祖母の死を伝えた彼女に、彼は、「本当に、ごめんね」と小声で言った。「どうして謝るの」と、華奈は聞き、彼が沈黙をしていると、途端に、まるでさっきの病室の続きをするかのように、滝のような涙をこぼした。誰にも、きつと本人にも理由のわからない涙を。

その日をさかのぼること、二ヶ月前、華奈のもう一人の弟の金定殷は、彼女から電話で、結婚をする、と聞いたとき、朗らかな、明るい声で姉に祝福の言葉を送った。

もともと金田定光という名前だった彼が「金定殷」と名

彼は聞いた。

「しょうがないがね。私、明後日だよ。結婚式」

「それはわかっとするけど。……で、どうなんや。婆ちゃん」

「病院に電話して、聞きゃあ」

彼は病院に電話をかけた。五分ほど話したあと、受話器を置くと、怪物を見るような目で姉を見て、言った。

「死んだつちうじゃねえか。なんで一人で帰ってきたるんや」

「ちよつと、どいて。電話するで。陽一さんと話、したいんだわ」

「こんなときにか」

「こんなときでだわ」

「聞いたら、伯父さん、婆ちゃんが韓国語でムルって言ったとき、水ってわからなかったらしいな。おふくろも。わかったのはうちの親父だけだったらしいがや。何や、この悲劇は」

「あんたは、韓国語、わかるんか」

「最近、勉強しとる」

「あんたもお父さんみたいになるんじゃないの。やめてよ、頼むで」

「なんや、お父さんみたいって」

「知つとるでしょう。おとうは、昔、スパイヤつとったん前を変えたのは、東京の私大に通っていたちようど二十歳の頃、その界限では急進左派として名高い在日朝鮮人の学生団体のメンバーの影響を受けてのことだった。住所のあつた新宿区の役所に行き、外国人登録証から「金田定光」を抹消し、本名のみを残す手続きをし、ついで大学の学生課に行き、本名を自分の名前とする手続きをしたのである。一切が済んだあとになって、彼は久しぶりに一宮の実家に戻り、母と姉、それから弟の三人の前で、そのことを伝えた。父には言わなかった。金田鉄男はその頃、商売に躰き、一時、どこかに雲隠れしていたのである。定殷は自分に影響を与えた団体についても説明をした。当時、音大に通っていた金田華奈は激怒して、言い放った。

「おまえ、いつからアカになったんや！」

「アカ……とな」。さすがに定殷は絶句したものだだった。

しかし、それももう昔の話だった。ご他聞に漏れず、定殷は、在日朝鮮人学生団体にはまるどころまではまった末に、その組織を辞め、同時に大学も中退をした。ソウルに渡つて、大学に入り直した彼は、渡韓の翌年には、韓国語をほとんど知らない彼に何かと親切にしてくれた、年が三つ上の下宿先の娘、尹芝賢と結婚をした。

彼が姉から電話をもらったとき、結婚前と同じ下宿屋の一間に居座り、しかし家賃は払わず、尹芝賢と暮らしていた彼には、もう娘がおり、その、太ももが妙に太く頑丈そ

うな、黒目がちな娘の口に妻が、「ポッポ、ポッポ、ポッポ、チュセヨ」と自分の顔を近づけて遊んでいた。ポッポというのは、日本語にすれば、「口づけ」の意味、というより「チュー」くらいの意味である。

目の前の妻と子の微笑ましい光景が彼に自然と姉への心のこもった祝福の言葉を言わせたらしかった。華奈は、結婚相手が日本人であることを慎重な物言いと言った。

「そういうことを気にする人間だって思われとるんやな、おれは」と定殷は笑った。

「よかった」と華奈は安堵の息をつき、ねえ、それで、と言った。「もうプログラムもできとるし、席も決まっとるんだわ。私は金田華奈だし、あんたは私の弟だで……」

「当たり前だろ」

「でしよう。だから、あんたの名前、金田定光にしといたで」

「……」

「悪いけど、あんたの奥さんは、金田トモコ。友達のトモに……」

「ちよつと待て！ 何の話や」と彼はとたんに、仰向けのまま両手両足を開いている娘と、その前で膝を折っている妻が驚いて振り返るほどの大声をあげた。彼は受話器を口で押さえて続けた。「韓国は夫婦別姓だぞ。彼女の性はあくまでユンや。どういう権利があつて、彼女にまで日本

降り、ソウルに電話をかけた。兄に祖母が死んだことを伝え、

「結婚式は翌日が婆ちゃん葬式だわな」と力なく言った。定殷は口汚く嫌味を言った。

「姉貴にとつては厄介な歴史がひとつなくなつて、ちよつとよかつたんじゃねえのか」

華奈の結婚式は予定通り、その二日後、つつがなく行われた。「合言葉は、死んだフリや」。金田鉄男は二人の息子にそう言った。不思議なことに、式のととき、新婦側家族の中で、華奈の人生の門出をもつとも深い感動をもつて見守っていたのは、定殷の妻、尹芝賢だった。娘、奎滌を抱いていた彼女は、華奈がお色直しをしてひな壇に上がるたびに、目尻をハンカチで拭った。「ウエ・タンシンニ・ウロ（どうして、あなたが泣くの）」と定殷はしつこく、まるでそれをやめさせようとするように妻に言った。尹芝賢はまるで夫から子供を守るように強く抱きしめて、言ったものだった。

「カンドンチヨギ……（感動的だからじゃないの。私たちの感動に干渉しないでよ）」

翌日、高美姫の葬儀が行われた。出かけに、金田鉄男が黒いネクタイをしている二人の息子に、「葬式のネクタイ

人のフリをさせるんだ。つつかか、一族郎党そろつて、日本人のフリをする気か。そんなことをさせる男と結婚して、幸せになると思つとるんか！」

「たわけ！ 陽一さんは全部、わかっとるわ。でも、しょうがないがや。向こうの親戚や知り合いにどんな人がおるかからんやで」

「あんたが偽りの幸せに邁進するのは結構だけど、オレは今さら金田なんて名前は使わんぞ。その名前はとうに死んだる」

「落ち着きゃあ、あんたは。ちよつと大人になりやあ」

「あんたが落ち着くことを望むわ」

「お姉ちゃんの、一生に一度のお願いだで！」

彼はそのまま電話を切ってしまった。怒りの収まらない彼のところに、数日後、姉からまた電話がかかってきた。

ちよつと替わるわ、今、病院だで、と言つて、電話口に出たのは、祖母だった。「オルグルチョムボジャ……（顔を見せな。みんな、それぞれの生き方があるんだぞ）」と彼女は声をふり絞るように言った。定殷は意を貫く足場を崩された形だった。

その定殷と同じ二十歳のとき、同じ組織の影響で、名前を金田相治からその名に変えた金田家の末弟、金相殷は、長電話をしていた姉がリビングからいなくなると、一階に

は白だぞ」などと言つて、「白は結婚式で昨日、終わつたわ」と次男がため息をつかなければならないほどの混乱ぶりだった。喪主をつとめた、故人の長男の意向に従つて、式は「金田美子」という名で執り行われた。済州島生まれで十五のときから海女として海に潜る毎日を送っていた彼女は、昭和十五年、二十歳の頃、渡日し、その直後に朝鮮半島内陸部出身の男と結婚をした。その男の姓が金で、「通名」が「金田」だった。その金某は、昭和二十年、解放に沸き立つ朝鮮半島に一人で渡り、そのまま行方をくらました。高美姫は五年間のみ生活を共にした、その夫の通名、「金田」をその後も名乗り、死ぬまでの六十年の歳月を「金田美子」として生きた。——だから、金田美子で決まるとる、というのが喪主の考えだった。定殷は弟の相殷が肩を叩く中、人目も憚らず泣き続けた。

新婚旅行に出かけていた華奈は、祖母の葬儀には参加していない。旅行から戻り、伯父の家に行き、祖母の仏壇の前で手を合わせたあと、彼女が真っ先にしたことは、韓国籍を日本国籍に変える手続きだった。

二

それから二十五年――。

七月最後の日曜だった、その日の昼下がりに、佐藤家の三

人、佐藤華奈と陽一、それから、その間に生まれた長女、かりんは、一宮市の中心街、本町通のアーケード街の一角にあるマクドナルド店にいた。窓の外に人影は疎らだった。立ち並ぶ店舗も半ば近くがシャッターを閉ざし、その多くは錆び付き、独特の厚みのある文字や下品な、いきり立った男性器の絵など、猥雑な落書きに覆われている。

「まあ、なんとかなるで」と陽一が沈黙を破って、娘のかりんに言った。その娘は、さつきからずつと、テーパーの上の、結婚式のプログラム案の書かれた紙を虚ろな目で見ていた。

高校を卒業後、IT関連会社に就職した陽一は——華奈と結婚した頃にはもうその会社で働いていた——今に至るまで、同じ会社に勤めているが、大学を出ていないせいだろう、職位は遅遅として上がらなかった。その間、後輩たちは次々に彼の上司になり、中には上に立つなり、横柄な口の利き方をする後輩もいる。それでも、家のローンが残っているし、今、目の前にいる娘は働いているものの、東京の大学に通う下の息子にはまだ仕送りが必要だから、わずかばかりの残業代でも稼ごうと職場に夜遅くまで残り続けている。

「ありがとう」と陽一の隣に座っていた華奈が言った。陽一が「はあ？」と怪訝な顔で見つめている中、彼女は紙ナプキンを手に取り、目尻の涙を拭いた。

な男だった。結婚披露宴の最後のプログラム、親族代表による挨拶を誰にするのか話題になると、彼は、新婦の側からにしようよ、とかりんに提案した。「披露宴の閉会の挨拶で当たり前のように新郎側の父が両家を代表するというのは、旧態依然とした家父長イデオロギーの表れだと思えます、そういうやり方をボクは壊していきたいんです。隗より始めよ、ここは、かりんちゃんの家族から出してくれませんか。何よりボクたちのためです」と堂々と淀みなく言った。彼女はその言葉と、それを言った彼に感動した。タクシー会社に事務職員として勤めている彼女の職場では、飲み会となると、ビールを当たり前のように女子社員に注がせる。そのオッサンたちの顔を思い浮かべ、爪の垢でも煎じて飲ませたいわ、と考えたほどだ。しかし、すぐに不安がよぎった。だからといって父には頼めない。あの口下手の父が人前でスピーチをするなんてできるはずがない——。そのとき、彼女の中に稲妻が走った。

「実は、うちの叔父さんの中に、大学の教授をしている人がいるの。話がとっても上手なの。ちょっと気難しい感じだけど。……金田定光って言うんだけど、その人ですう？」

未来の新郎は、かりんちゃんがそう言うなら、と賛成をし、のちには、その家族もまた、彼女の考えに賛成をした。こうして列車が走り始めたあとになって、彼女は、何かの

今や彼女にかかると、陽一の言動の一切は彼女への愛の証に化ける。何日か前の晩も、陽一は夢にうなされ、「この手があかんのや、この手が」と自分の片手を堅く握った別の手をハンマーに、これでもかこれでもかと激しく叩いていた。ギョツとして目覚めた華奈は夫を起こし、夢の内容を尋ねたが、彼は、なんやのなんやの、と寝ぼけて答えただけだった。ところが、彼女は翌朝から大騒ぎで、知人や自分の母にこの話を伝え、独自の解釈を披露した。うちの陽一は自分の薄給のせいで家族を棄にしてあげられないことを夢の中でまで後悔しとる。私たちのことをどこまで深く愛しとるか、わからんに！

「なんとかって、どう、なんとかなるの」と佐藤かりんは、涙をすすり始めた母を横目に、父に挑みかかった。

「いや、まあ、だから、……なんとかなるって」

「私が悪いんか」とかりんは凄んだ。

「いや、これは、誰が悪いということではなくてだな、どちらかというと、要するに、歴史とか時代とか、そう、複雑な国際情勢とか……」

一ヶ月ほど前のことである。その日、かりんは、短大を卒業以来、四年近く付き合っていた恋人と、名古屋市内にある一軒の喫茶店で、自分達の結婚式のプログラムについて話し合っていた。恋人は、名古屋大学出身で、名古屋市内の公立高校の国語教師をしている、いかにも真面目そう

ついでのように、自分の父と母に「サダミツ叔父さんに親族代表の挨拶をしてもらうことになった」と言った。

娘の話を聞いた佐藤陽一と華奈の顔は俄かに曇った。

「悪いけど、この世の中には、金田定光教授という人はいないんだわ」と華奈は怪談でも話すような調子で、言った。

「わかるでしょ。……忘れたの？」

かりんは、アツ、と自分の口を手で押さえた。

「でも、えっ、皆、あの叔父さんのこと、サダミツおじさんとか、みっちゃんおじさんとか呼んでるが。ずつと呼んどうったが」

「だから、それは……なんというか、……わからんかね」

「わかつとるなら、わかつとるように、言つてよ」

「だから、あの叔父さんは、あなたが生まれる前、二十歳の頃から、韓国の名前を使つとるんだわ。それまで使つとった名前を突然、変えたんだわ。変な考えに洗脳されて、でも、こっちはすぐには変えれんでしょう。呼び方なんです」

「それは知つとるわ。ママが前も言つとったで」

「じゃあ、何がわからんの」

「だから、なんで……。なんで、私、そんなこと知つとったのに、知つとったことを、私は忘れとったの！」

「あなたが知つとったことを、あなたが忘れとった理由を、私がわかるかね」

「もういいよ。いいじゃん。その韓国の名前でもやってみよう。キン、テイ、インだったよね。インは、中国の大昔の国の名前みたいな漢字だったよね」

「たわけ！」と華奈は一喝した。「あの叔父さんが韓国の名前を使えば、爺ちゃんも、婆ちゃんも、ソウちゃん叔父さんも使わなかったら、おかしくなるやろう。ドミノ倒しだわ。結婚式はあなたの相手が来るだけじゃないんだよ。結婚式はな、世間そのものが来るんだわ！」

いやに力の漲った華奈の一言がかりんを黙らせた。それ以上は、この問題について家の中で話すこともできないまま、今日に至り、さつき、名古屋の結婚式場の会議室で、先方の家族と一緒に、プログラムの最終確認をしていたときも、誰もストップをかけられないまま、ぼんやりと案を了承してしまっただけである……

「まず、そのコーラ、飲んで落ち着きゃあ」と華奈は娘に言った。「まあ、なんとかなるで」

「だから、なんとかって、どうなるとかなるの！」
かりんはプログラム案をクシャクシャに丸めて、もういい、と憤然と言った。

「ママのこと、正直に向こうに言うよ。それでいいよ。それでダメになるなら——」

「たわけなこと言つとりゃあよ！」と華奈は顔を真っ赤にして、娘に怒鳴った。「あの伯父さんが少し我慢すれば、

れ、苦笑いを口に浮かべる以外、彼に何ができたろうか。

彼の名前は、韓国・朝鮮語で発音すれば、目下、彼の前に黒々と広がっている海に向こう一二〇〇キロ先で、その一帯の誰よりも豪奢で、堅牢な建物の中にいるはずの人物の名前と全く同じ、「キム・ジョンウン」だった。二十歳の頃、その名前を使うことにしたときには、予想だにしないかった試験に彼は日夜、さらされる羽目になったのである。

ソウルの大学を出て、さらに大学院の修士を出た彼は、そのあと妻と子連れて東京に行き、博士課程に進んだ。

博士号をとったあと、三十五歳のとき、幸いにも、栃木の中規模私立大学に職を得た。そこで彼は社会思想史を学生達に教え続けた。最新の研究成果を盛り込む以外は、講義内容の基本線は同じだったが、震災から二年が経ったころ、突如、ネット上に、彼の名前をあげての「反日左翼の講義はごめん」という書き込みが現れた。書き込みは年々、酷くなり、そのうち殺害予告が現れた。彼は苦笑いをするだけで、やり過ごした。その苦笑いが強張り、不安が心に宿り始めたのは、彼がじかに教えた学生がネット上で中傷をしていることを知ったときからだった。一切は義憤にかられた学生が逐一、教えてくれたことである。しばらくして、授業後の無記名アンケートに、学生の一人が「反日チョン

は出て行ってほしい」と書いてあったのを知った。今度はアンケートを機械的に入力した職員から、「授業改善基礎

いいだけだがね。ママに任せとくだわ！」

その翌日の月曜、一宮から遠く離れた山形鶴岡の夜の浜辺で、定股はかき集めた流木から上がる炎に向かって、果てしもなくため息をつき続けていた。黒い海がザザーと穏やかに波を寄せては返す浜辺に、もちろん彼以外に人影はない。

「先生、先生つてやつば、キム・ジョンウンの親戚とかっすか」

今日もまた、二時限目の講義が終わったあと、受講していた女子学生の数人が賑やかに彼のところにやってくるなり、そう言い、ギャハハハハ……と何の屈託もなく、あくまで明るく朗らかに笑った。

たとえば、世界を震撼させた9・11同時多発テロ。それを鶴岡短期大学の学生達の多くは知らない。彼はこの四月に赴任して、はじめてのゼミの際、「キューティンイチイが世界に与えた影響は……」と言いかけて、妙な雰囲気になり、確かめてみたところ、それを知っているのが十名の学生のうち二名ほどであるという、それこそ驚愕の現実と直面した。その二名に対して、周囲の学生がその博学につき、賞賛の言葉を送る始末だった。歴史を知らないという以上に、世界には歴史があるということを知らないのではないかと訝しい彼女たちの「ギャハハ」を前に、呆

資料」なるものを手渡されて、知ったものである。彼の不安は、もつと悪いことが起こるに違いない、という予感に変わった。予感は外れなかった。一全国紙の地方版に、彼の講義——名前は伏せてあったが、ネット検索を厭わない人であれば誰だつて彼のことを指していると思われるだろう書き方だった——を問題視する学生の声の記事に出たのである。新聞社が「大学の今」と銘打って開いた学生による座談会の中の発言だった。講義の一部を成しているナシヨナリズムに関する彼の説明が、ひどく偏つていて、とてもついていけない、という「意見」だった。その新聞は取っついていなかったが、どこかでそれを知った同僚の一人がこれもまた義憤に駆られて、彼に教えたのである。そして、ついに、昨年のゴールデンウィーク明けの最初の授業日、彼は、自らの目で、迷彩柄の黒っぽいカーゴパンツを履き、ニット帽を被った中年男が正門前で彼を中傷するビラを配っているのを目撃した。彼は結局、自らその大学をやめた。

数ヶ月後の秋、彼は幸運にも鶴岡短期大学の国際保育学科なる学科に再就職先を得た。彼は、「男のくせに黙って引き下がる気か」と前任校をやめたとき、怒り狂っていた妻に、そして、ほとんど話をしなくなっていた、東京の大学院に入ったばかりの娘に、「新規まき直しだ、新天地で研究に打ち込む」と宣言したものだ。ところが、年が

明け、着任するなり、彼は次々と、前任校とは教育と研究の環境がまるで違うことに気づいた。個人用の研究室はなかった。研究費などというものは一切、ないと知った。「社会学」として受け持った講義は事実上、中学で学ぶ地理と歴史の授業に等しいものだった。そのうち、学生の保育園実習に同行するよう命じられた。そして、梅雨の頃、早期退職した教員の一人が、決定的な事実を彼に教えた。国際保育学科は、とつくに閉鎖へのカウントダウンが始まっていますよ。ご存知なかったんですか……。

度重なる試練に耐える男のズボンの尻ポケットの中でスマホが鳴っている。音にようやく気付いて、手に取った彼は、画面を見るなり、思わず舌打ちをした。応答のマークをスライドさせると、果たして、

「サダか、私だわ。……あのさあ、うちのかりん、結婚するんだわ」。のつけから、テンションの高い、姉の尾張弁だった。

その佐藤華奈は、周囲を田圃に囲まれた夜のコンピニの前から電話をかけていた。夕食を食べておえて、アイスクリームでも買ってくるわ、と言って、わざわざ車に乗って、やってきたのである。庭で履いているつっかけを履いたまま――。

「……おめでどう。よかったね」

「……」

「勝手に名乗ったとか、おかしなことを言うな。二十歳の頃――」

「昔話はええわ」と華奈は弟の過去を一蹴した。「かりんが先方にポロツと、あんたが大学の先生をやつとるつて言っちゃったんだわ。そしたら、ぜひシメの挨拶を、つてなったの。そういう流れなの！ いいがね。モノじゃべるの、あんたうまいがね」

「待てよ、待て。さつきから、おかしなこと言ってるな。

おい、挨拶までやれつてのか。ちなみに忘年会じゃないんだから、シメの挨拶とは言わねえぞ。だいたい、大学の先生だからやらせるつていう権威主義的な発想は、オレは好きになれん」

「何を言つとるの。向こうは頭がやわらかいんだに」

「はあ？」

「頭がやわらかくなかったら、新婦の方にメシの挨拶をやらせんでしょが」

「メシの挨拶じゃねえ。シメの挨拶だ。少なくとも、あなたの用語では」

「タワケ！ あんたが忘年会とか、言うでだわ。とにかく、向こうは男女平等の思想なの。開けとるんだわ。かりんは恵まれとるわ！ 私とおんなじだわ！」

定股は首を二度三度、横に振った。ポーポーと黒い海か

「なんや、もつと喜べよ。……ま、ええわ。とにかく、式は十一月な。それで、また悪いけど、いろいろ面倒だから、あんた、金田定光で出てちよ。だって、披露宴会場にキム・ジョンウンが座つとつたら、おかしいやろう！」

「……ネームプレートの名前にふり仮名をつけるわけでもないだろうよ」と定股はいかにも忌々しそうに言った。

「どっちでもおんなじだわ。わかつとるだろう」

「死んだ名前の前に座っている、もう一度――。かりんちゃん、陽一さんも、そういう考えなんか」

「皆、おんなじ考えだわ。誰だつておんなじ考えになるに決まつとるがね」

「……わからん」

「なにが！ 三時間、金田定光つてネームプレートの前に座つとつて、ちよつと挨拶すりゃいいだけだがね。何が死んだ名前や。格好つけとりゃあよ。あんたは、金田定光だがね。なのに、あんたが、突然、勝手に、キム・ジョンウンとか名乗り始めたから、面倒なことになつとるんやろう。なんなの、キム・ジョンウンつて。気持ち悪い」

華奈はそれだけ言うと、店先の灰皿の前でタバコを吹かしている数人の近所の悪ガキが自分を見ている気がして、ジロリと睨み返してから、背を向けた。ふと、その姿が弟に被った。そこはコンピニになる前は信用金庫だった。弟は夜になると、そこで高校の友人たちとよくタバコを吸つ

ら風の音が聞こえてきた。彼はしばらくその風の音を聞いていたあと、

「オレの今の気持ちわかるか」と言った。

「なんやの、言つてみやあ」

「海の向こうのキム・ジョンウン労働委員長に助けを求めたい気分だ」

「タワケなことばつか言つとらんと、素直に姪の人生の門出を祝つたらんか！ お姉ちゃんの一生に一度のお願いだぞ！」

「違う。二度目だ」。定股はそこだけは強い語調で言った。

「わかつとるわ！ ……わかつとるけど……」と言って、華奈は突然、黙りこくってしまった。

焚き火の勢いがもう弱くなつていことに定股は気づいた。騒ぎ出した風に抗する力もなさそうだった。

「サタちゃん、頼むで。お願いだで……」

信じがたいことに、彼の耳に姉の突然のすすり泣きが聞こえてきた。

「わかったよ」と彼は立ち上がり、ひどくつまらなそうに靴で火に砂を被せた。「少しだけ考えさせてくれ。あんたたち家族が困るような結論は、出さんと思うで」

「ありがとう」と華奈は潤んだ声で言い、電話を切った。近所の悪ガキはもうどこかに消えていた。

「マルクスが書いてたね。歴史は繰り返す。一度目は悲劇として、二度目は喜劇として。ただ、喜劇と普通、訳される部分のドイツ語の原語は——」

「ファルス、ですよ。英語だとファース。だから、むしろ茶番って訳す方が適切なんですよ。ただ、その茶番の一方の主演、山形のキム・ジョンウンはひどく深刻ですけどね。時間は流れたのか、この国について。サンウン叔父さんはどうなんですか」

佐藤かりんの結婚式を明日に控えた一月半ばの土曜日の昼過ぎ、金相殿の営む、東京墨田区の個人学習塾の中だった。この学習塾に、今、大学院一年目で、そこから電車で三十分ほど離れたところで一人暮らしをしている定股の娘、金奎澁は週に二度、アルバイトをしに来ている。大きなテーブルが四つほど置かれた教室で、さつき最初のグループの授業を終えて、次のグループが来るのを待ちながら、そのテーブルの一つに座って、お茶を飲んでいこうとした。

相殿は、日本の大学を出たあと、アメリカの大学の修士に行き、そこでアメリカ人の女性と結婚したが、その相手は国際弁護士で、今も日米間を行き来しているし、二人の息子はアメリカで暮らしているから、事実上、一人暮らし世の中にある言葉を、それこそ藁をつかむ気持ちで、掴み取って、その言葉で、呼びかけたときからね。オンマにせよ、ママにせよ、あるいはグァイにせよ。世の中を生きたためには、叫びは死んでいなければならない。スゴイネ、ジャパンに住む在日の場合、なおさらだよ。だから、お父さんだって、大丈夫。ちゃんと死んでみせるよ。……でも、キユリン、問題は、終わった後、一宮の家に戻った後だろうね。かのジョンウン氏は家に戻ったら、荒野のトラになる。あるいはファルスそのものになる」。

相殿はそれだけ言って、奎澁の湯飲みに急須のお茶を注いだ。奎澁は注いでもらった湯飲みを包むように、かじかんでいた両の手のひらを当て、

「それが怖い」と笑った。

「で、彼女とはどうなの？」

「続いています。でも、難しい関係ですから、どうなることやら。……すみません、後学のために伺いたいんですけど、わかりますか、異性愛者の男に、私たちの気持ち

が」

「うちの息子は、もてない男だから、よく恋をする。そのたびに、心からがんばってくれと願う。ただ、決して息子のセックスは想像しない。したこともないし、しようと思つたこともない。こんなことを言っていいかどうかかわからないけど、君から君の恋の話聞いたあと、ボクは、キ

に等しい。明日の結婚式にも妻と子供は来ない。

相殿も奎澁とともに、手先が器用で、料理好きだから、家で作ったものが余ったりすると、わざわざ届けに行った。叔父と姪の関係でありながら、どことなく近所付き合いに似た奇妙な関係を、ここ半年くらいの間、続けている。

「ファルス——」と相殿は言った。「日本語風にそう発音すると、いわゆるところのファルス、つまり男根と同じになる。ボクはそちらの意味でのファルスだと思ってるんだな、前回の結婚式も、今回のそれも。実のところ、結婚式というものの全般について」

「つまり、男根劇、ですか」

「そんなところ。だから、今度も前と同じ構えで行く。死んだフリをする。一度目のとき、我が家の暴言王、鉄男が言ってた通りに。膨張するファルスには距離を置くに如くはない」

「山形のジョンウンも叔父さんみたいな境地に達するとい

「まあ、大丈夫だよ。歳を重ねれば、実のところ、誰でも、必要なときに死んだフリをするスキルは覚える。当人が気づいていないだけで。いや、それはきつと人が言葉を覚えたときから、そうかもしれないよ。自分にお乳を飲ませてくれる人に向かって、自分が作ったわけでもない

私たちのセックスについて、考えていた。その自分に気づいたとき、やめよう、バカか、オレは、と思った。息子を応援する気持ちは、そのセックスについて考えないことが前提だ。同じ前提に立てばいい、立つべきだ、そう思った。考えてみれば、誰だって、他人の恋の話聞いたとき、それが男女間のものであっても、たいしては、自然にそうしているはずだしね。……それからは、君を心から応援したくなった。今では、もしかすると、息子以上に、がんばってくれと思うことがある。もしかすると、こんな言い方は不適切かもしれないけど、ときどき切なくなるほどに、応援している。君にはがんばってほしい。心からそう思っている。ときどき涙が出る。——ボクはおかしいかな。答に



亜紀書房 1600円+税

なっているかな」

「叔父さんらしい答だと思えます。それから」と奎漣は言った。「叔父さんの考え方、それに生き方、好きです。ありがとうございます」

そのあと、すぐに次の子供たちがやってきた。奎漣はもう二時間、叔父と一緒に、テーブルに座って宿題をしている子供達の間に入り、勉強を手伝った。そして、陽がまだ落ちる前に塾を出て、東京駅に行き、そこから新幹線で名古屋に向かった。大学の学部時代から付き合っていて、今、大阪の商社で働いている彼女にホテルで会うために。

翌日、名古屋の結婚式場で、新郎と並んでひな壇に座った佐藤かりんはスポットライトの下、終始、涙を流し続けた。

新婦側の一番隅のテーブルでは、「おい、綺麗だがや、かりん、綺麗だがや」とその母、華奈が隣に座った夫に何度も小声で言って、娘よりもおびただしい量の涙を流した。一方の父、陽一は新郎の一挙手一投足を、仇でも討とうとするような、尖った目つきで睨み続けた。そのテーブルにはほかに彼の家族が座り、穏やかに談笑を続けていた。

その隣の「金田」テーブルでは、相股が何度も席を立ち、新郎側の家族のもとに行き、お酒をついで、戻ってきた。そして、そのたびに隣の佐藤テーブルに行き、あんたが行

くもんだぞ、ちよつと注いでこいよ、と姉の華奈に耳打ちした。

定股は運ばれてきた食事にはほとんど手をつけず、またほとんどの時間を喰さえ開かず、その場に鎮座していた。何度もハンカチで目元を拭っていた尹芝賢は夫の様子に呆れ、ついには「タンシン……(あんた、寝てるの)」と肘を突いたほどだった。その尹芝賢は、娘に何度も、なにかあったの、と聞いた。奎漣は、式の間中、いかにも心ここにあらずの様子だった。誰かが彼女に話しかけるときだけ、形だけの受け答えをするばかりだった。テーブルにはほかに金田鉄男とその目付け役、妻の律子が座っていた。

キャンドルサービスのと、新郎側の男友達が余興として、全裸に近い姿で現れた。次の瞬間、K-POPの音楽が流れ、裸の一团がその曲に合わせて、踊り始めた。怒涛のような笑いと拍手が会場に沸いた。金田テーブルでは尹芝賢が手を激しく叩いた。しかし、それ以外は誰一人、笑いもせず、拍手もしなかった。口には苦々しそうな笑みを浮かべ、眉は険しく寄せられていた。

「ここで尋ねたい」と金田鉄男がテーブルの中央に顔をぐつと寄せた。その周りに顔が集まると、彼は言った。「時代は変わったのか」。

「あんたは、ちよつと黙とりやあ。面倒なことになるで」と律子が答えた。

「何も変わっていない」と定股が、まるで毒を吐くタイミングを待っていたかのように、真つ先に答えた。「何も変わっていないから、陽気に裸で踊っている。そのうち、誰かがキム・ジョンウンの物まねでもするんじゃないのか。

オレが彼らなら、そうするね。その方が面白いから。会場の中の誰かが今、複雑な、やりきれない感情に囚われているかもしれない、などとは想像もしない。彼らには、そんなことを想像する必要も、義理もないから」

「能力もないからだ、と加えてはどうかね。キム・ジョンウン先生」と何やらひどく嬉しそうに言ったのは、金田鉄男だった。

「火に油をそそぎやあすな、タワケ。ミツも必死に我慢しとるんやで。それにしても、ああ、情けない。あんたは、素直に楽しめんのかね」と律子が言った。それから夫を除く一同に言った。「私は楽しんどるよ。私も一緒に踊ったるかね」

「お義母さん、一緒に行きますか？」と尹芝賢は席から立ち上がりそうな勢いで答えた。

「まあ、素直に楽しむことにしようや。この空間では、そうするのがふさわしい、ということだけははっきりしてるんだから」と相股が何かを諦めたように言った。

「どうせ、茶番じゃん」と奎漣が言った。小声だが、声にドスが利いている。水のような冷たい目が手元の料理を

じつと見下ろしている。金田テーブルは凍りついた。

「すみません、すみません」と隣のテーブルから佐藤陽一がやってきて、言った。「たぶん何も考えずに……。皆さんに、無茶なお願いをしているのに。いや、でも……あの子達は、何も知らないから……」

……最後になりましたが、皆様のご健康とご繁栄をお祈り申し上げ、これをもちまして両家の挨拶とさせていただきます。「金田定光」はそう言って、挨拶を締めくくり、拍手を浴びながら、席に戻った。その途中、さつきK-POPの音楽に合わせて踊っていた新郎側の友人の前を抜けるとき、誰かがふざけて、「さすがキングダイチ教授、かっこいい」と言った。

相股は、椅子に座った兄に、よう、がんばったぞ、と小声で呟いた。椅子の脇に腕をたらし定股の、強く握られた手はぶるぶると震えていた。それが相股の目に映った。もう終わったで、と相股は、新郎に腕組をされ、笑顔を振りまきながらひな壇からおりてきた姪の花嫁姿を遠く見たまま、兄の手をぼんぼんと叩いた。

式が終わると、疲れ切った「金田」家の面々は、今では金田鉄男と律子が二人だけで暮らしている一宮の家に戻った。リビングの横の、障子で仕切られた畳の部屋の床の間

に、水の一杯も飲めないままにこの世を去った高美姫の写真が飾ってある。一同は家に着くなり、すべてを心得ている様子で、ぞろぞろとその部屋に入っていく、その写真に向かって整列をした。「さあ」と先頭に立つ金田鉄男が号令を発すると、一族は彼にならって、揃ってひざまづき、頭が畳につくまで深々とお辞儀をした。二度、同じことをしたあと、顔をあげた鉄男が厳かにも言った。

「死人に口なし。それはこの世の真実だ。しかしながら、もしあったら、言うだろう。キュリン、次はお前だ。次こそ、見せてくれ、キムの名で、肩の凝らない結婚式を……」

「だが、心配だ」と奎瀧はにこりともしせずに、金田鉄男のあとを引き継ぎ、高美姫になりかわった。その写真を背筋を伸ばして見つめたまま、言った。「お前達に、その勇気があるのか。キム・キュリン、その子が望むもの、心から望んでやまないもの、それを知る勇気がお前たちにあるのか。その子が望むものは……」

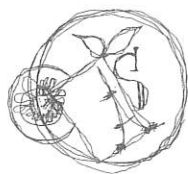
姿勢を崩さず、まっすぐと写真を見ている彼女の目からはいつの間にか涙が溢れていた。肩を震わせながら、無理にその先を話そうとする彼女を相殿が止めた。「もう大丈夫だよ、大丈夫。キュリン。その先はぼくが……」。

頬を伝った彼女の涙が、膝を折っている腿の上にポタリと落ちた。黒のズボン……。親と子として共にしてきた長い時間が、定殿に娘が言おうとしていることを気づかせた。

彼の腿の上にも涙が落ちた。

「それでも、自分で言うてくください」と彼は娘に言った。「あなたが言いたいことを言えなくさせているものが、もしこの家にもあるとしたら、この家にこそあるのなら、なおさら、申し訳ない、自分で言うてくください。あなたの望んでいる未来を」

翌年の二月には、望まれた未来の第一歩が踏み出された。鶴岡の海辺のホテルでタキシードを着た女性とウエディングドレスを着た二人の女性によるいかにも奇妙な結婚式が行われたのである。窓の外では荒れた海の上を雪が舞っていた。司会者が「新郎側、あ、いや、……新婦キム側」と混乱するたび、会場は陽気な笑いに包まれた。一際、大きな笑い声が上がっていたのは、鶴岡短期大学の女子学生たちが陣取るテーブルからだ。タキシードの新婦とウエディングドレスの新婦による「新婦新婦退場」のあと、新しい水色のドレスの新婦とチマチヨゴリの新婦が再登場したときは、割れんばかりの拍手と歓声、それに口笛が鳴り響いた。異様な興奮に包まれる中、金田鉄男は息子の耳元に囁いた。キム・ジョンウン先生、革命の日は近いようです。さっそく律子が彼を咎めたのは言うまでもない。



倉木基志

くらき もとし

1967 愛知県生まれ
早稲田大学中退、高麗大学卒業、
名古屋大学大学院満了
博士号取得
2013年から東北学院大学経済
学部教授

銀華文学賞

受賞の言葉

倉木基志

ほっとした。中学生の頃に小説家になりたいと思ってから、ずいぶんと長い時間が経っている。書き続けてもいいですよ。選考委員の方々からそう声をかけられたような気がする。書きたいこと、書かなければいけないと思っていることは山ほどある。が、今回の小説を書く中で、学んだことは小説は「何を書かないか」が要だということ。文学の可能性を信じて、今後も言葉を紡いでいきたい。ありがとうございます。

鳥ちゃんのこと

初老のオカマがある日、
ぼくの部屋に飛び込んで来た！

女に妻を盗られた男と、女に亭主を盗られたオカマの、
奇妙な生活がその夜からはじまった！
鳥ちゃんとぼくの、哀歓あふれるラブコメディ！

河野 つとむ

1600円(税込/送料共)
グイーツソリューション
御注文はアジア文化社まで

評伝 吉野せい
メロスの群れ
小沢美智恵

「怒を放し想を握ろう」吉野せい

文壇とは縁もなく生きてきた「百鬼バウバウ」が、七十年代半ばになって刊行した本「涙をたらしめた神」。その作品は、これまでの文学者の権ひとりとして描きえなかったような生活の重みと、鋭い切れ味の文体を持っていた。

Single Gun Publishing House

1600円+税
シングルカット社